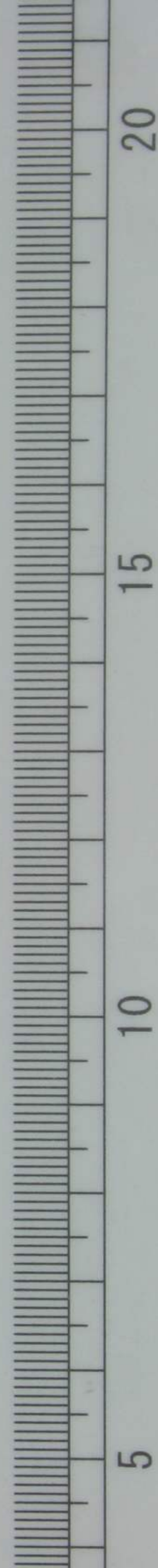


代名作選集
白秋篇



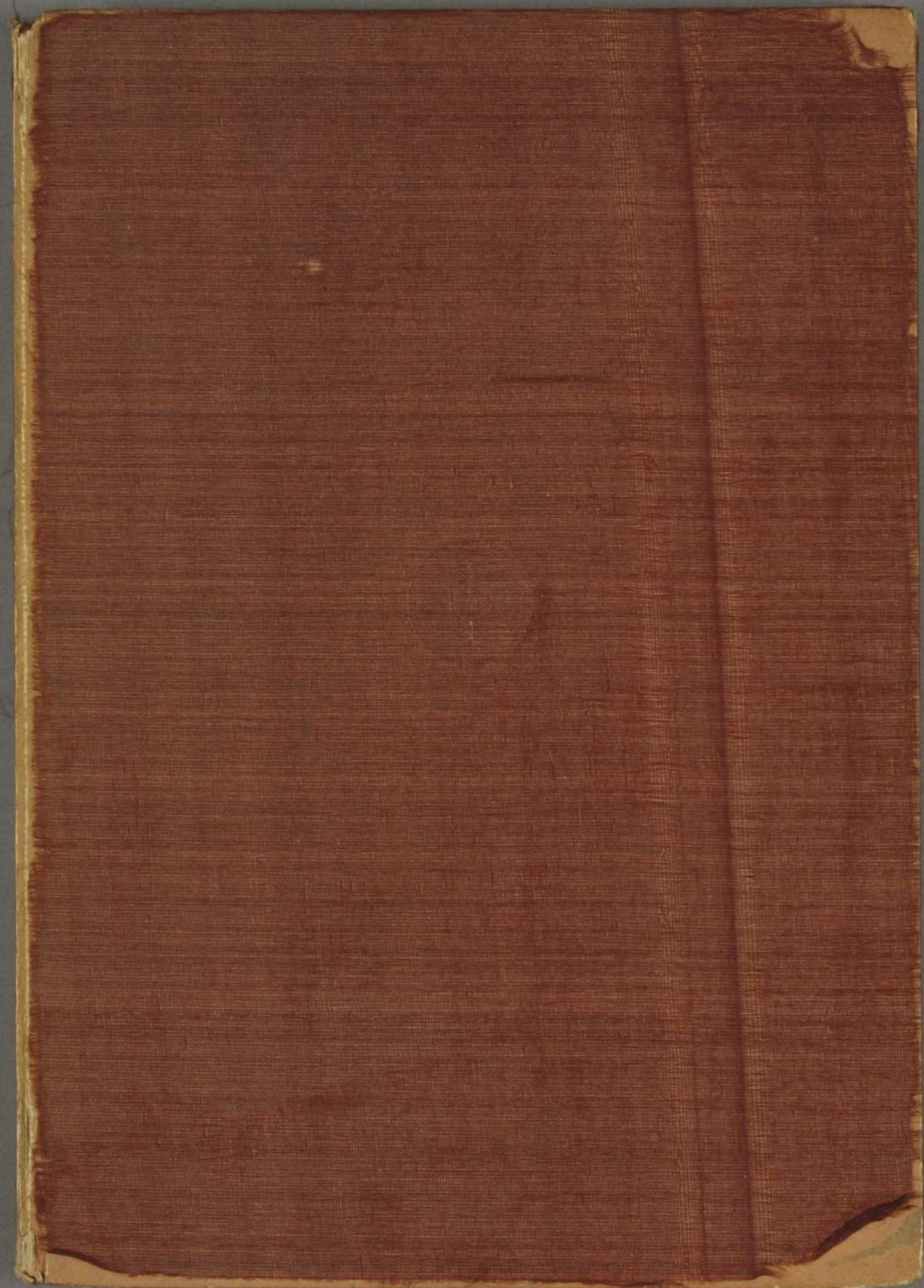


白秋詩歌選

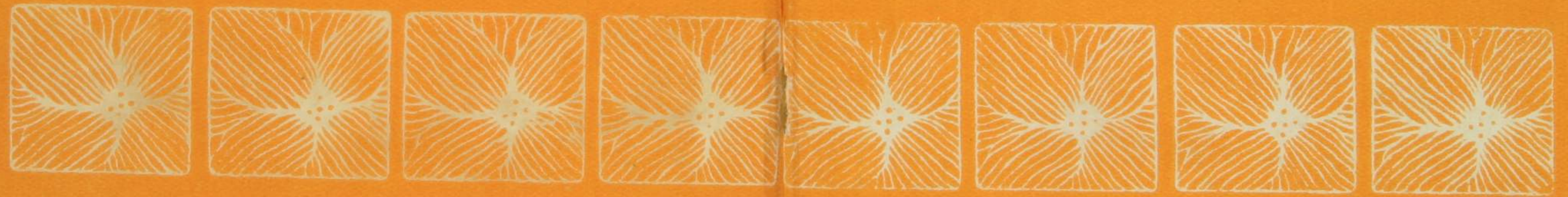
白秋



代表的名作選集



SANSEIDO
KANDA TOKYO



■ 代表的名作選集 (42)

白秋詩歌選

北原白秋作

東京
新潮社
出版

解題

明治四十二年の春、その最初の詩集「邪宗門」を上梓してこのかた、白秋氏の著作の世に公にされたるもの、詩集十二卷、歌集七卷、小唄集二卷、民謡集一卷、童謡集九卷、散文集六卷に及んでゐる。字々金玉にして、しかも十五年間の所産三十有七卷、その豊饒と富贍と、まことに驚く可きものがある。此の一冊は、以上三十七卷の中より、作者自ら、その精粹を抜いたもので、最近の二年間を除くあらゆる時代の作品を悉くし、俳句と散文とを除くあらゆる作品の種類を悉くしてゐる。白秋の全作を大きな花園に喩へるならば、これはこれ、その全園の、最も美しきもののみを摘みあつめたる一つの花籠である。

題解

編者識

詩

邪宗門……………四

邪宗門秘曲……………四

濁江の空……………五

謀叛……………六

顔の印象……………七

盲ひし沼……………八

幽閉……………一〇

角を吹け……………一一

ただ秘めよ……………一二

鴿……………一二

思ひ出……………一三

序……………一三

金の入目に縹子の黒……………一四

みなし兒……………一五

断章……………一六

見果てぬ夢……………一九

鶏頭……………二〇

椎花……………二〇

人の坊……………二二

願面……………二二

水密……………二三

螢密……………二三

秘密……………二四

東京景物詩……………二六

公園の薄暮……………二六

新開紙……………二七

ペンギン……………二八

白金の獨樂……………二九

生……………二九

掌……………三〇

麗日悻音……………三〇

薔薇の木に……………三

林檎……………三

やささい……………三

ながめ……………三

つなで……………三

野晒……………三

畑の祭……………三

崖の上の麥畠……………三

お婆らが登つてゆく路……………三

崖……………三

新月……………三

雨中小景……………三

海雀……………三

水墨集……………三

雪に立つ竹……………三

竹林の七賢……………三

老子……………三

鷹……………三

終日風あり……………三

初秋の朝飯……………三

落葉松……………三

棗の花の……………三

白秋小唄集……………三

城ヶ島の雨……………三

千羽雀でも……………三

芭蕉……………三

とまり舟……………三

萱の千駄も……………三

空に眞赤な……………三

ビール樽……………三

薄いなさけに……………三

薊の花……………三

民謡と小唄……………三

次 目

芥子の葉……………五
 片戀……………五
 泊夫藍……………五
 槍持……………五
 紺屋のおろく……………五
 山の唄……………五
 野茨に鳩……………五
 あしの葉……………五
 竹林幽居……………五
 朝顔……………五
 麥搗踊の唄……………五
 馬の顔……………五
 牛曳き……………五
 お月夜……………五
 那須の娘……………五
 樂器……………五
 BAN-BAN……………五

ふくら雀……………五
 空は青雲……………五
 日本の笛……………五
 沖の大船……………五
 あの子とうり子……………五
 あの子この子……………五
 沖の小島の……………五
 鯨網……………五
 郷愁……………五
 鳥で……………五
 日の入り……………五
 鳥のたより……………五
 伊那……………五
 夜寒……………五
 ここらあたりか……………五
 野焼のころ……………五
 鳥かげ……………五

童 謡

次 目

思ひ出と東京景物詩……………八〇
 人形つくり……………八〇
 南京さん……………八三
 曼珠沙華……………八三
 とんぼの眼玉……………八四
 お祭……………八四
 ほうほう螢……………八七
 山のあなた……………八七
 赤い鳥小鳥……………八八
 あわて床屋……………八八
 祭の笛……………九〇
 げんげ草……………九〇
 南の風の……………九二
 朝……………九二
 こんこん小山……………九二

吹雪の晩……………九二
 りんりん林檎の……………九三
 雀のお宿……………九四
 良寛さま……………九四
 和蘭陀船……………九一
 雲の歌……………九九
 お月見……………一〇〇
 兎の電報……………一〇二
 兎の電報……………一〇二
 雪のふる晩……………一〇二
 葉つばつば……………一〇三
 花咲爺さん……………一〇四
 むかし囃……………一〇四
 虎の煙草……………一〇五
 雨のあと……………一〇五
 郵便くぼり……………一〇六
 寄り道……………一〇七

白秋詩歌選

北原白秋

次 目

葛飾閑吟集……………	一三三	雀の卵……………	一三三	雲母集……………	一三四	桐の花……………	一三六	短歌	雀追ひ……………	一三四	お月さま……………	一三三	鷹……………	一三三	べチカ……………	一三三	春まで……………	一二二	からたちの花……………	一二二	陸と海……………	二〇〇	新入生……………	二〇九	子供の村……………	二〇九	わらび……………	二〇八	かやの木山……………	二〇八
------------	-----	----------	-----	----------	-----	----------	-----	----	----------	-----	-----------	-----	--------	-----	----------	-----	----------	-----	-------------	-----	----------	-----	----------	-----	-----------	-----	----------	-----	------------	-----

麻布山……………	一五四	童と母……………	一五三	立枯並木の歌……………	一五二	孟宗と月……………	一五〇	竹の林の歌……………	一四九	山中消息……………	一四六	紅葉を焚いて……………	一四四	觀相の秋……………	一四四	雀の卵……………	一四二	輪廻三鈔……………	一四〇
----------	-----	----------	-----	-------------	-----	-----------	-----	------------	-----	-----------	-----	-------------	-----	-----------	-----	----------	-----	-----------	-----

— 目次了 —

0
YO

詩

卷之四

詩

詩

詩

詩

詩

詩

詩

詩

邪宗門

邪宗門祕曲

われは思ふ、末世の邪宗、切支丹でうす
の魔法

黒船の加比丹を、紅毛の不可思議國を、
色赤きびいどろを、匂鏡きあんじやべい
いる、

南蠻の棧留縞を、はた、阿刺吉、珍酔の
酒を。

目見青きドミニカびとは陀羅尼誦し夢に

も語る、

禁制の宗門神を、あるはまた、血に染む

聖磔、

芥子粒を林檎のごとく見すといふ欺罔の

器

波羅韋僧の空をも覗く伸び縮む奇なる眼

鏡を。

屋はまた石もて造り、大理石の白き血潮

は、

ぎやまんの壺に盛られて夜となれば火點

るといふ。

かの美しき越歴機の夢は天鵝絨の薫にま

じり、

珍らなる月の世界の鳥獸映像すと聞けり

あるは聞く、化粧の料は毒草の花よりし

ぼり、

腐れたる石の油に畫くてふ麻利耶の像よ

はた、羅甸、波爾杜瓦爾らの横つづり青

なる假名は

美しくしき、さいへ悲しき歡樂の音にかも

満つる。

いざさらばわれらに賜へ、幻惑の伴天連

尊者、

百年を刹那に縮め、血の磔背にし死すと

も

惜しからじ、願ふは極秘、かの奇しき紅

の夢、

善主鷹、今日を祈に身も靈も薫りこがる

る。

濁江の空

腐れたる林檎の如き日のにほひ

圓らに、さあれ、光なく甘げに沈む

晩春の濁重たき靄の内、

ふと、カキ色の輕氣球くだるけはひす。

詩

遠方の曇れる都市の屋根の色
たゆげに仰ぐ人はいま鈍くもきかむ、
濁江のねぶたき、あるは、やや赤き、
にほひの空のいづこにか洩るる鐵の音。

なやましき、さは江の泥の沈澱より
あかるともなき灰紅の帆ふくらみに、
傳へくる潜水夫が作業にか、
館えたる吐息そこはかと水面に黄ばむ。

河岸になほ物見る子らはうづくまり、
はや倦ましげに人形をそが手に泣かす。
日暮どき、入日に濁る靄の内、

また、ふくらかに輕氣球くだるけはひす。

謀 叛

ひと日、わが精舎の庭に、
晩秋の靜かなる落日のなかに、
あはれ、また、薄黄なる噴水の吐息のな
かに、
いとほのにギオロンの、その絃の、
その夢の、哀愁の、いとほのにうれひ泣
く。

蠟の火と懺悔のくゆり
ほのぼのと、廊いづる白き衣は

詩

夕暮に言もなき修道女の長き一列。
さあれ、いま、ギオロンの、くるしみの
刺すがごと、火の酒の、その絃のいたみ
泣く。

またあれば落日の色に、
夢燃ゆる噴水の吐息のなかに、
さらになほ歌もなき白鳥の愁のもとに、
いと強き硝薬の、黒き火の、
地の底の導火燧き、ギオロンぞ狂ひ泣く。
跳り来る車輛の響。
毒の彈丸、血の烟、閃めく刃、
あはれ、驚破、火とならむ、噴水も、精
舎も、空も。

紅の、戦慄の、その極の
瞬間の叫喚燧き、ギオロンぞ盲ひたる。

顔の印象

A 精 舎

うち沈む廣額、夜のごとも凹める眼——
いや深く、いや重く、泣きしづむ靈の精
舎。
それか、實に聲もなき秦皮の森のひまよ
り
熟視むるは暗き池、谷その水のをの
き。

詩

いづこにか薄日さし、きしりこきり斑鳩
なげく、

寂寥や、空の色なほ紅にほひのこれど、
静かなる、はた孤獨。山間の霧にうもれ
て

悔と夜のなげかひを懇に通夜し見まも
る。

かかる間も、底ふかく青の魚盲ひあぎと

ひ、
口そそぐ夢の豹水の面に血音たてつつ、
みな冷やき石の世と化りぞゆく、あな恐
怖より。

鳴ききたる鵝鳥のうから
しらしらと水に飛び入る。

午後六時、また噴きなやむ管の湯氣、
壁に凭りたる素裸の若者ひとり
腕拭き鐵の匂にうち噎ぶ。
はた、あかあかと蒸汽鐘音なく叫び、
そここゝに咲きこぼれたる芹の花、
あなや、しととにおしなべて日ぞ照りそ
そぐ。

聲もなき鵝鳥のうから
色みだし水に消え入る

詩

かくてなほ聲もなき秦皮よ、祕に火とも
り、

精舎また水晶と凝る時、愁やぶれて
響きいづ、響きいづ、最終の靈の梵鐘。

盲ひし沼

午後六時、血紅色の日の光

盲ひし沼にふりそそぎ、濁りの水の
聲もなく傷き眩む生おびえ。
鐵の匂のたと冷み沁みは入れども、
影うつす煙草工場の煉瓦壁。
眼も痛ましき香のけぶり、機械とどろく。

午後六時、鵝鳥の見たる水底は
血潮したたる沼の面の負傷の光
かき濁る泥の臭みに疲れつつ、
水死の人の骨のごとちらぼふなかに
もの鈍き鉛の魚のめくるめき、
はた浮びくる妄念の赤きわなき。

逃げいづる鵝鳥のうから
鳴きさやぎ汀を走る。

午後六時、あな水底より浮びくる
赤きわなき——妄念の猛ると見れば、
強き煙草に、鐵の香に、わかき男に、
顔いだす硝子の窓の少女らに血潮滴り、

詩

歡樂の極の恐怖の日のおびえ、
顛ひ高まる苦痛を朱にくづるる。

刹那、ふと太く湯氣吐き、
吼えいづる休息の笛。

幽 閉

色濁るぐらすの戸もて
封じたる、白日の日のさすひと間、
そのなかに蠟のあかりのすすりなき。

いましてがた、蓋閉したる風琴の忍びのう
めき。

そがうへに睡盲ひたる嬰兒ぞ戯れあそぶ
あはれ、さは赤裸なる、盲ひなる、ひと
り笑みつつ、
聲たてて小さく愛しき生の臍をまさぐり
ぬ。

物病ましさのかぎりなる室のといきに、
をりをりは忍び入るらむ戯けたる街衢の
囃子、

あはれ、また、嬰兒笑ふ。

いことと、ひそかなる母のおとなひ
幾度となく戸を押せど、はては敲けど、
色濁る扉はあかず。

詩

室の内暑く悒鬱く、またさらに嬰兒笑ふ。

かくて、はた、硝子のなかのすすりなき
蠟のあかりの夜を待たず盡きなむ時よ。
あはれ、また母の愁の恐怖とならむその
みぎり。

あはれ、子はひたに聴き入る、
珍らなるいと可笑しきちやるめらの外
の一節。

角を吹け

天草雅歌の一
わが佳耦よいざともに野にいでて

歌はまし、水牛の角を吹け。
視よ、すでに美果實あからみて
田にはまた足穂垂れ、風のまに
山鳩のこゑきこゆ、角を吹け。
いざさらば馬鈴薯の畑を越え、
瓜哇びとが園に入り、かの岡に
鐘やみて蠟の火の消ゆるまで
無花果の乳をすすり、ほのぼのと
歌はまし、汝が頸の角を吹け。
わが佳耦よ、鐘きこゆ、野に下りて
葡萄樹の汁滴る邑を過ぎ、
いざさらば、バアテルの黒き袈裟
はや朝の看經はて、しづしづと
見えがくれ棕櫚の葉に消ゆるまで、

無花果の乳をすすり、ほのぼのと
歌はまし、いざともに角を吹け、
わが佳耦よ、起き來れ、野にいでて
歌はまし、水牛の角を吹け。

ただ祕めよ

天草雅歌の二

曰ひけるは、
あな、わが少女、
天草の密の少女よ。
汝が髪は鴉のごとく、
汝が唇は木の實の紅に没薬の汁滴らす。
わが鴿よ、わが友よ、いざともに擁かま
し。

薫濃き葡萄の酒は
玻璃の壺に盛るべく、
もたらしし麝香の臍は
汝が肌の百合に染めてむ。
よし、さあれ、汝が父に、
よし、さあれ、汝が母に、
ただ祕めよ、ただ守れ、齋き死ぬまで、
虐げの罪の咎はさもあらばあれ、
ああただ祕めよ、御くるすの愛の徴を。

鴿

天草雅歌の三

わかうどなゆめ近よりそ、
かのゆくは邪宗の鴿、

日のうちに七度八度
潮あび化粧すといふ
伴天連の祕の少女ぞ。
地になびく髪には蘆薈
嘴にまたあかき實を塗る
淫らなる鳥にしあれば、
絶えず、その眞白羽ひろげ

思ひ出

序 詩

思ひ出は首すぢの赤い螢の
午後のおぼつかない觸覺のやうに

乳香の水したたらす。
されば、干なゆめ近よりそ。
視よ、持つは炎か、華か、
さならずば實の花果か、
兎にもあれ、かれこそ邪法。
わかうどなゆめ近よりそ。

ふうわりと青みを帯びた
光るとも見えぬ光？

あるひはほのかな穀物の花か、

落穂ひろひの小唄か、

暖かい酒倉の南で

ひき揉しる鳩の毛の白いほめき！

音色ならば笛の類、

蟾蜍の啼く

醫師の薬のなつかしい晩、

薄らあかりに吹いてるハーモニカ。

匂ならば天鷲絨、

骨牌の女王の眼、

道化したピエローの面の

なにかしらさみしい感じ。

放埒の日のやうにつらからず、

熱病のあかるい痛みもないやうで、

それでゐて暮春のやうにやはらかい

思ひ出か、たゞし、わが秋の中古傳説？

金の入日に繻子の黒

金の入日に繻子の黒――

黒い喪服を身につけて、

いとつつましようひとはゆく。

海のあなたの故郷は今日も入日のさみし

かろ。

夏のゆく日の東京に

茴香艸の花つけて淡い粉ふるこのごろを

ほんに品よきかの國のわかい王もさみし

かろ。

心ままなる歌ひ女のエロル夫人もさみし

かろ。

金の入日に繻子の黒――

黒い喪服を身につけて

いとつつましようひとはゆく。

九月の薄き弱肩にけふも入日のてりかへ

し、

粉はこぼれてその胸にすこし黄色くにじ

みつれ。

金の入日に繻子の黒、

かかるゆふべに立つは誰ぞ。

みなし兒

あかい夕日のてる坂で

われと泣くよならつばぶし……

あかい夕日のてるなかに

ひとりあやつる商人のほそい指さき、舌

のさき、

糸に吊られて、譜につれて、

手足顫はせのぼりゆく紙の人形のひとを

どり。

あかい夕日のてる坂で

やるせないぞえ、らつばぶし、
 笛が泣くのか、あやつりか、なにかわか
 ねど、ひとすぢに
 糸に吊られて、音につれて、
 手足顫はせのぼりゆく戯け人形のひとを
 どり。

手足顫はせのぼりゆく紙の人形のひとを
 どり。
 あかい夕日のてる坂で
 消えも入るよならつばぶし……

断章

五

なにかわかねど、ひとすぢに
 見れば輪廻が泣きしやくる。
 たよるすべなき孤兒のけふ日の寒さ、身
 のつらさ、
 思ふ人には見棄てられ、商人の手にや弾
 かれて、
 糸に吊られて、音につれて、

暮れてゆく雨の日の何となきものせはし
 さに
 落したる さは紅き實の林檎、ああその
 林檎、
 見も取らず、冷かに行き過ぎし人のうし

ろに、
 灰色の路長きぬかるみに、あはれ濡れつ
 つ
 ただひとつまるびたる、燃えのこる夢の
 ごとくに。

七

見るとなく涙ながれぬ。
 かの小鳥
 在ればまた来て、
 茨のなかの紅き實を啄み去るを。
 あはれました。
 啄み去るを。

二十三
 彌古りて大理石はいよよ眞白に、
 彌古りてかなしみはいよよ新らし、
 彌古りて彌清く、いよよかなしく。

二十四

泣かまほしさにわれひとり、
 冷やき玻璃戸に手もあてつ、
 窓の彼方はあかあかと沈む入日の野ぞ見
 ゆる。
 泣かまほしさにわれひとり。

二十五

柔かきかかる日の光のなかに、
いまひとたび、あはれ、いまひとたび、
ほのかにも洩らしたまひね、
われを戀ふと。

三十九

忘れたる、
忘れたるにはあらねども……
ゆかしても、戀ひしともなきその人の
なになればふともかなしく、
今日の日の薄暮くろがたのなにかさは青くかなし
き、
忘れたる、
忘れたるにはあらねども……

四十八

なにゆゑに汝なは泣く、
あたたかに夕日にほひ、
たんぽぽのやはき滑息野なめいきに蒸して甘くち
らばふ。
さるを女、
なにゆゑに汝なは泣く、
薄青き齒科醫しくがいの屋いへに
夕日さし、
ほのかにも硝子は光る。
あはれ、女、

五十九

その戸いでいづちにかゆく……
黄なる陽ひびに汝なを見れば
われもまたほの淡き齒痛しつうをおぼゆ。

見果てぬ夢

過ぎし日のしづころなき口笛は
日もすがら葦の片葉の鳴ることく、
ジプシイの晝のゆめにも顫ふるらん。
過ぎし日のあどけなかりし哀愁かなしみは
こまやかに匂におシヤボンの消ゆるごと
目のふちの青き年増としまや泣かすらん。
過ぎし日のうつつなかりしためいきは
淡うすら雪赤のマントにふるごとく、

梨

おもひでの襟のひらうど身にぞ沁む。
吹き馴れし銀のソプラノ身にぞ沁む。
過ぎし日の、その夜の、言はで過ぎにし
片おもひ。
ひと日なり、夏の朝涼あさすずい、
濁酒賣る家の爺やと
その爺の車に乗りて、
市場へと。——途みちにねむりぬ。
山の街まち、珍めづら物見の
子こごころも夢にわすれぬ。

さなり、また、玉名少女が
ゆきずりの笑も知らじな。

その歸さ、木々のみどりに
眼醒むれば、鶯啼けり。
山路なり、ふと掌に見しは
梨なりき。清しかりし日。

鶏頭

秋の日は赤く照らせり。
誰が墓ぞ。風の光に
鶏頭の黄なるがあまた
咲ける見てけふも野に立つ。

母ありき、髪のはつれに

日も照りき。み手にひかれて
かかる日に、かかる野末を、
泣き濡れて歩みたりけむ。

ものゆかし、墓の鶏頭。
さきの世か、うつし世にてか、
かかる人ありしを見ずや、
われひとり涙ながれぬ。

椎の花

木の花はほのかにちりぬ。

日もゆふべ、椎の片岡、
影さむみ、薄ら光に
君泣きぬ、われもすがりぬ。
髪まみの香か、目見まみのうるみか、
衣きぬそよぎ、裾すそにほそぼそ、
蟲啼きぬ、——かかるうれひに。

ああ、かくて、君よいくとき、
かく縫り、かくや泣きけむ。
そのかみか、いまか、うつつか、
さて知らじ、さきの世のゆめ。

願人坊

雪のふる夜の倉見れば
願人坊を思ひ出す。
願人坊は赤頭巾、
目も鼻もなく、眞白な
のつべらぼんの赤頭巾。

「ちよぼくれちよんがら、そもそもわつ
ちが
のつべらぼんのすつべらぼん、すつべら
ぼんののつべらぼんの、
坊主になつたる所謂因縁いんねんきいてもくんね
え、

しかも十四のその春はじめて……
踊り出したる悪玉が

詩

願人坊の赤頭巾。

かの雪の夜の酒宴に、

我が顔へしは恐ろしきあるものの面、「色

のいの字の」

白き道化がひと踊り……

乳母の背なかに目を伏せて

恐れながらにさし覗き

淫らがましき身振をば幽かにこころ疑ひ

ぬ、

なんとなけれどおもしろく。

「お松さんにお竹さん、椎茸さんに干瓢

さんと……

手練手管」が何ごとか知らぬその日の赤

頭巾

悪玉踊の變化もの。

雪のふる夜の倉見れば

願人坊を思ひ出す。

雪のふる夜に、戯けしは

酒屋男の尻からの踊り上手のそれならで

最も醜く美しく饑ゑてひそめる仇敵

おのが身の淫ところと知るや知らずや。

水面

ゆふべとなればちりかかる

柳の花粉のうすあかり、

そのかけに透く水面こそ

けふも * Ongo の眼つきすれ。

またなく病めるおももちの

君がこころにあまゆれば、

渦のひとつは色變べて

生贍取の眼を見せつ。

恐れてまたも凝視むれば

銀の * Benjo のいろとなり、

ハーモニカとなり、權となり、

またもかの兒の眼となりぬ。

詩

柳の花のちりかかる

樋のほとりのやんま釣り、

ひとりつかれて水面に

薄くあまゆるわがこころ。

Ongo 良家の娘、小さき令嬢、柳河語。

Benjo 肌薄く、紅く青き銀光を放つ魚、

小さし。同上。

螢

夏の日なかのデキタリス、

釣鐘状に汗つけて

光るこころもいとほしや。

またその陰影にひそみゆく
螢のむしのしをらしや。

そなたの首は骨牌の

赤いチャツクの帽子かな、

光るともなきその尻は

感冒のここのほの青し、

しをればはてたる幽霊か。

ほんに内氣な螢むし

嗅げば不思議にむしあつく、

甘い薬液の香も濕る、

晝のつかれのしをらしや。

白い日なかのチキタリス。

秘密

桑の果の赤きものかげより、午後の水面

は光り

奇異なる新らしき生活に蛙らはとんぼが

へりす。

ねばれる蛇の卵見ゆ、かつは臭のくさけ

れば

*カメノシユブタケ 蟹めつつ毛根を水に

顫はす。……

かなたこなたに咲く花は水ヒアシンス、

その紫に蜻蛉めてなにか凝視むれ、一心

に。

に心おびゆる。

1、ガメノシユブタケ。水草の一種、

方言。

2、おみかの婆。おみかと呼ぶ狂氣の

老婆なり。つねにわが酒倉に來て

この酒倉わがものぞ、この酒もわ

がものぞ、Tonka John 汝もわが

ものぞ。汝の父母と懐かしむ彼や

つらは全く赤の他人にてわれこそ

は汝が母ぞよとわれを見ては脅か

しぬ。

そのとき、われは桑の果の赤きかげより、
祭日の太鼓の囃子厭はしく、わが外の世
をば隙見しぬ。
かの銀箔の歎きこそ魔法つかひの吐息な
れ、
皮膚の痛みにえも鳴かぬ蛙の、あはれ、
宙がへり。

かかる日にこそわが父母を、かかる日に
こそ、
眞實ならずと來て告げむ、* おみかの婆

東京景物詩

公園の薄暮

ほの青き銀色の空気に、
そことなく噴水の水はしたたり、
薄明ややしばしさまかへぬほど、
ふくらなる羽毛頸巻のいろなやましく女
ゆきかふ。

つ四つ

色淡き紫の弧燈したしげに光うるほふ。
春はなほ見えねども、園のこころに
いと甘き沈丁の苦き苔の
刺すがごと沁みきたり、瓦斯の薄黄は
身を投げし靈のゆめのごと水のほとり
に。

つつましき枯草の濕るにほひよ……
圓形に、あるは楕圓に、
劃られし園の配置の黄にほめき、露に三

暮れかぬる電車のきしり……

凋れたる調和にぞ修道女の一人消えさり

裁判はてし控訴院に留守居らの點す燈は
疲れたる硝子より弊私的里の瞳を放つ。

新聞紙

いづこにかすずるける春の暗示よ……
陰影のそこここに、やや強く光劃りて
息ふかき弧燈枯くさの園に歎けば、
面黄なる病兒幽かに照らされて迷ひわづ
らふ。

一九一〇、六月、はじめの月曜、
冷めたい朝の七時、
つつましい馭者臺のうへに、
ただひとり爽かに折りかへす新聞紙の
緑の薄い反射……

隴げのつつましき匂のそらに
なほ妙にしだれつつ噴水の吐息したたり
新しき月光の沈丁に沁みも冷ゆれば
官能の薄らあかり銀笛の夜とぞなりぬ
る。

微かな鐵分をふくんだ空氣に
まだ青味を帯びた棕櫚の花が
かよわい淡黄色に光り、
ちらほらと夏帽子の目につく
なつかしいいだらだら坂の下の

H分署の前の通……せはしい電車の鐸……

……

撒水夫の唧筒を動かすさびしさ、

濠端の火の消えた瓦斯燈に

白マントルが顫へ、

その硝子の一点に日光の金が光つてる。

わかい馭者は

窓のないカキ色の囚人馬車を

梧桐のかけにひき入れたまま、

しづかに讀み耽る……

こころもち疲れた馬の呼吸……

短く刈つた栗毛の光澤から沁み出る

臭の奇異な汗ばみ、その上にさしかくる

新聞紙の新しい觸感、

わか葉の薄い緑の反射。

新しい客を待つ間、

やすらかな五分時が過ぎゆく……

ペンギン

見知らぬ海と空とに

鳴いてゐる、鳴いてゐる、ペンギン、

なにを鳴くのか、ペンギン、

光と陰影の申子。

冷たい氷のうへから

歌うてくるペンギン、

なにを慕ふのか、ペンギン、

寂しい空のところに。

紺と白との燕尾服で、

ものおもふペンギン、

なにが悲しいのか、小意氣な

わかい紳士のペンギン。

さらさら悲しい様子も、

うれしさうにもない、ペンギン、

なにを慕ふのか、ペンギン、

幽かな空の光に。

白金の獨樂

生命

おそれも悔もない氣ぶりで、

あるいてくる、ペンギン、

なにが楽しいのか、ペンギン、

大勢あつまつて、のんきに。

光りかがやく圓きもの、

あたりまばゆくふりかへる。

光りかがやく圓きもの、
あたりまばゆく目をつぶる。

光りかがやく圓きもの、
光り澄みつつ掌を合す。

掌

光りかがやく掌に、
金の佛ぞおはすなれ。

光りかがやく掌に、
はつと思へば佛なし。

光りかがやく掌を、
うちかへしてぞ日もすがら。

麗日悸音

五

麗らかや
出で入る息の、
わがのぞとおもへば、息の。

麗らかや。はれ。

薔薇の木に

薔薇の木に
薔薇の花さく。

なにごとの不思議なけれど。

林檎

ぼんと落ちたる音したり。

十方じつぽう法界ほふかいうららかに

眺め廻せど事もなし。

林檎のぼんと落ちた音。

やさい

ぎんのさかなのとびはぬる
やさいばたけにきてみれば、
ぎんのさかなをとらへむと、
やさいあわててはをみだす。

ながめ

かがやくものはみなきえぬ、

きえたるものはまたひかる、
ひかり、きえ、
きえ、ひかり、
ひかりつきせず、ひねもす、けふも。

野 晒

死なむとすればいよいよに
命戀しくなりにけり。
身を野晒のざらしになしはてて、
まことの涙いまで知る。

つ な で

ひかりかたまりなきまろび、
をんなこどもはなにすとか、
をんなこどもはつなでひく、
かがやくうみをばひきあぐる。

人妻ゆゑにひとのみち
汚しはてたるわれなれば、
とめてとまらぬ煩惱ぼんぼうの
罪のやみぢにふみまよふ。

畑 の 祭

崖の上の麥畠

眞赤なお天道てんたうさんが上らつしやる。やつ

こらさと

鎌を下らすと、ケンケンケンケン……

鷓鴣みそつちよめが鳴きくさる、

崖の上の麥畠、

天氣は快よし、草つ原に露がいつばいで、

そこいら中ギラギラしてたまんねえ。

九右衛門くゑもんさん、麥は上作だんべえ、

蠶豆そらまめもはぢきれさうだ。

ええら、いい風だな、沖ぢやまだ眠つて

ゐるだが、

俺おれちの崖の下は眞蒼だ。

——そうれ、また、さらさら、ざぶん、

ざぶん、んん……

尖とんがり岩に波がぶつかる、

怖おそかねえほど静かぢやねえかよ、

まるで、はあ、鮑あわの殻見たいにチラチラ
するだね。

南風が吹きあげる。
やれ、やれ、今日も朝つばらからむんむんするだぞ。

何でも構うこたねえ、
胸をづんと張りきつてな、うんとかう息を吸ひ込んで見るだ。

熟れ返つた麥の穂がキンキラして、
うねつたり、凹んだり、
扁平たく押つかぶさると、
魔阿女でも、何でも、はあ、壓つ倒して
やつたくなるだあ。

眞赤なお天道さんが燃えあがる、
雲がむくむく燥き出す、

狂ひ出すと——吃驚したが、
畔の仔牛が鳴き出す、

わあといふ聲がする、
村中で穀物を扱き出す、
ぢつとして居らんねえ、
俺ちも豆でも撈るべえ。

赤ちやけた麥と蠶豆、
ぐんぐん押しわけてゆくてえと、
たまんねえだぞ……素つ裸で、
地面にしつかり足をつける、うんと踏ん
ばろ、——

まん圓いお天道さんが六角に尖つて
四方八方眞黄色に光り出す。——

そこで、俺ちも小便をする。

赤ちやけた麥と蠶豆、
ほうれ見ろ、旦那さあが
手に一杯何だか擴げて

讀んで行かつしやるだ、旦那さあ、
大けえ新聞だね、東京の新聞けえ、
紙がふんふん匂ふだ。

おやあ、蟬が鳴いてるだな、
どうしたただか、これ、ふんにと奇異だぞ、
熟れ返つた麥の中で眞面目くさつて鳴い
てるだ、

あつはつはつ……これ、ふんにと不思議

だぞ、

何んでも、はあ、地面にかじりついて
一生懸命に鳴いてるだ。

夏が来ただな、夏が来ただな、
海から山から夏が来ただな。

あつはつはつはつ……
あつはつはつはつ……

お婆らが登つて
ゆく路

暗い坂から坂の頂邊を見れば、
「臺」の空火事じゃ、野は火事ぢや。

山の段々畑みな火事ぢや、
やつこらさつさ、やつこらさ。
白髪のお婆らがやつこらさ。

もう日が暮れるぞ、危ないぞ、
石ころ坂ののぼり坂、
木の葉はきらめく、麓は眞つ闇、
時雨はさんざと、
崖土やこぼれる、やつこらさ。

栗鼠の眼が光るぞ、
暗い坂、のぼり坂、山葡萄どろの實が熟
れた。
涙垂らすな、お勘婆、

やつこらさつさ、やつこらさ。

くわつと出た、畑に出た、
粟穂が眞赤に。麓の女郎屋にや灯がつい
た。

畑道やうねり道
こほろぎはこほろころ、
やつこらさつさ、やつこらさ。

やれ、蜻蛉が飛んだ、火が飛んだ。
電信柱に燃えついた。
お薯はころげる。畑ぢや逃げ出す、
追っかけて取つちめろ、お婆も好きだよ
お若いの。

やれ、汝も尻拭け、お時婆、
慾ばれ、氣ばれ、白髪染塗れ、お熊婆。

やれ、上見りや限りやなし、下見りや限
りやなし、
諦めさんせの、因果なもんだよ、
泣いても焦れても、死したらお陀佛、
やつこらさつさ、やつこらさ、
長命や爲まいぞ地獄の夕焼。

天竺は火事ぢや、世は火事ぢや、
俺らが一生はなほ火事ぢや、
やれ、もひとつくだれ、下り坂、
やれ、もひとつあがれ、上り坂、

ふはつはつは、いつひつひ。

天竺は火事ぢや、世は火事ぢや、
長命や、恥かい、地獄の夕焼、
やれ、もひとつくだれ、下り坂、
やれ、もひとつあがれ、上り坂、
やつこらさつさ、やつこらさ。

崖

崖は稍倦みそめぬ、葛かづらの
厚く青き悲みは満ち傾きぬ。
光は十方無碍に歎きつつ、まづ、
最上層の大きな葉にふりそそぐ。

葉は今驚く、光の重みに堪へかねつつ、
 下なる圓葉に照り傾く、その光
 滾れもあへず、下葉の面をゆり動かせば、
 その次の葉は更に強く、光り、且つ、揺
 れくつがへる、
 葉より葉へ、かづらみながら
 ただ燦爛と流るる如く、躍る如く。

その間も、銀の輪を畫くもの
 空に響く、何ともわかず、
 麗らかに甘く、くるしく、濕氣さへ帯び
 て、

その輪は次第に一點に縮まらんとす。
 静けさや、かづらの葉、

光は溢れつくして、また元のままに落ち
 つけば、
 數しれぬ鈴なりの葉もまた静まる。

時に輪は點となり、うつくしき蟲となり、
 光りつつ、凝視めつつ、
 その中の青く青く最も厚く
 光澤ふかき葉の中心にちつと留まる。
 微妙端嚴の綠玉。
 正午すこし前
 蟲はいま金となる。

新月

斷崖の松の木に

月ほそくかゝりたり、

ほそき月

金無垢の月。

入海の波間にも

また、月はしづきゆく

沈々と

金の鈎。

金無垢のするどさよ、

絹漉の雨ののち、

しんじつに

走りいづるその蒼さ。

島黒く、海黒き

眞の闇

舟ひとつすみゆく、

そのうへにはそき月。

なにかわかぬ、

魚族は目をさまし、

鈴蟲は一心に鳴きしきる。

虔の極まり。

闇の夜は斷崖も、松の木も、

かげわかず、ゆく舟も見えわかず、

ただ光るほそき月、

金無垢のほそき月。

雨中小景

雨はふる、ふる雨の霞がくれに
ひとすぢの煙立つ、誰が生活ぞ。
銀鼠にからみゆく古代紫、
その空に城ヶ島近く横たふ。

なべてみな空なりや、海の面に
輪をかくは水脈のすぢ、あるは離れて
しみじみと泣きわかれゆく、
その上にあるかなきふる雨の脚。

海雀

遙なる岬には波もしぶけど、
絹漉の雨の中、蟹小舟ゆたにたゆたふ。
棹あげてかぢめ採りゐる
北齋の蓑と笠、中にかすみて
一心に綱うつは安からぬけふ日の惑ひ。
さるにてもうれしきは浮世なりけり。
雨の中、をりをりに雲を透かして
さ緑に投げかくる金の光は
また雨に忍び入る。音には刻めど
絶えて影せぬ鶴鶴のこゑをたよりに。

水墨集

海雀、海雀、

銀の點々、海雀、

波ゆりくればゆりあげて、

海雀、海雀、

銀の點點、海雀。

波ひきゆけばかげ失する、

雪に立つ竹

聖らかな白い一面の雪、その雪にも
平らかな幅のかげりがある。
幽かな緑とも、また、紫ともつかぬ、
なんたるつめたい明りか。

竹はその雪の面に立ち、

ひとつひとつ立つ。
まつすくなそれらの幹
露はな間隔の透かし畫。

實にこまかな枯葉であるが、
それにも明日の芽立がある。
影する雲の藍ねずみにも
ああ、豆ほどの白金の太陽。

かうした午後こそ閑けさはあれ、
光と影とのいい調和が、
濕つて、さうして安らかな慰めが、
おのづからな早春の息づかひが。

聖らかな白い一面の雪、その雪にも
平らかな幅のかげりがある。

雪に立つひとつひとつの竹、
それにも緑の反射がある。

竹林の七賢

さても黄色い圓月である、

さても閑雅な竹林である。

七人の賢い人、風月の友、
この幽人たちの面持、姿、

その清らかさはがぎりもないが、
あまりに世の中からかけ離れた、
それゆゑの月の出か、

明るい眞近な光である。

ああ、いま、せせらぐものに

何かのたよりがきこえさうだ。

さてもこの良夜に

言葉を失くした

ひとつひとつの靈である。

近いやうでもまた

遠い銀と紫の世の中である。

老子

青の牛に白の車を挽かせて、

老子は幽かに坐つてゐた。

はてしもない旅ではある、

無心にして無爲、

飄々として滞らぬ心、

函谷關へと近づいて來た。

ああ、人家が見える、

馭者は思はず車を早めたが、

何をいそぐぞ徐甲よと、

老子の微笑は幽かであつた。

相も變らぬ山と水、

深い空には晝の星、

道家の瞳は幽かであつた。

鷹

群青の濃い松葉を

さうさうと鳴らすは風か、

溪川のむせびか、

ともあれ、代楮の鱗形の枝にとまつて、

わたしの鷹は鋭く、

天の纖月を凝視めてゐる。

終日風あり

枯れがれの吹かれどうしの薺^{しほすたま}が
耀^{かがや}きながらに音を立つるよ。
わたしも見ながらひとり通るよ。
枯れがれの吹かれどほしの薺^{しほすたま}が、
耀^{かがや}きながらに音を立つるよ。

秋はずしき山水^{やまみづ}に
時たま涵^{ひた}るわがこころ。

白の朝飯、
白芙蓉。

初秋の朝飯

正眼^{まさめ}に観^み入る

白芙蓉。

落葉松

今朝^{けさ}も身に染む
水しぶき。

幽かに聴くは
瀬のひびき。

からまつの林を過ぎて、
からまつをしみじみと見き。

からまつはさびしかりけり。
たびゆくはさびしかり。

四

からまつ二の林を出でて、
からまつ二の林に入りぬ。
からまつ二の林に入りて、
また細く道はつづけり。

からまつ四の林の道は
われのみか、ひともかよひぬ。
ほそぼそと通ふ道なり。
さびさびといそぐ道なり。

五

三

からまつ三の林の奥も
わが通る道はありけり。
霧雨^{きりさめ}のかかる道なり。
山風のかよふ道なり。

からまつ五の林を過ぎて、
ゆるしらず歩みひそめつ。
からまつ五はさびしかりけり、
からまつ五とささやきにけり。

六

からまつあさまねの林を出でて、
浅間嶺あさまねにけぶり立つ見つ。
浅間嶺にけぶり立つ見つ。
からまつあさまねのまたそのうへに。

七

からまつあさまねの林の雨は
さびしけどいよよしづけし。
かんこ鳥鳴けるのみなる。
からまつあさまねの濡るるのみなる。

八

世の中よ、あはれなりけり。
常なけどうれしかりけり。

山川に山がはの音、
からまつあさまねにからまつのかぜ。

棗の花の

棗なちめの花の咲くところ、
光は強く、陽は青し。
棗なちめの下に啼く蛙。
蛙と呼ばひ惚れ遊ぶ。
棗なちめよそよげ、青空に。

民謡と小唄

白秋小唄集

城ヶ島の雨

雨はふるふる、城ヶ島の磯に、
利休鼠の雨がふる。
雨は眞珠か、夜明の霧か、
それともわたしの忍び泣き。

千羽雀でも

雨はふるふる、日はうす曇る。
舟はゆくゆく、帆がかすむ。

千羽雀でも
寂しうて騒ぐ。

まして、お母やん、
わしやひとり。

舟はゆくゆく通り矢のはなを
濡れて帆あげたぬしの舟。
え、舟は櫓でやる、櫓は唄でやる、
唄は船頭さんの心意氣。

芭蕉

馬で目ざめて、峠で明けて、
夢は野末の茶の煙。

萱の千駄も

立つる煙はほそぼそなれど、
やはり浮世の泊り舟。

煙だつならほそぼそたちやれ、
月に芭蕉のひとり旅。

萱の千駄も、
背負はせて置いて、
誰が後から、
火を放けた。

とまり舟

葦間出て見よ、煙があがる、
あれは時雨のもやひ舟。

空に眞赤な

空に眞赤な雲の色、
玻璃に眞赤な酒の色、

なんでこの身が悲しがる、
空に眞赤な雲のいろ。

ビール樽

ころがせ、ころがせ、ビール樽、
赤い夕日のなだら坂、
とめてもとまらぬものならば、
ころがせ、ころがせ、ビール樽。

薄いなさけに

薄いなさけにひかされて、
今日もほのかに來は來たが。

薊の花

今日も薊の紫に、
刺が光れば日は暮れる。

思ひきらうか、きるまいか、
そつと歸るか、何とせう。

いつそあの日のくちづけを、
後のゆかりに別れよか。

思ひきらうか、たづねよか、
ええ、なんとせう、しよんがいな。

何時か野に來てただひとり
泣いた年増がなつかしや。

芥子の葉

芥子は芥子ゆゑ香もさびし。
ひとが泣かうと泣くまいと、
なんのその葉が知るものぞ。
ひとはひとゆゑ身のほそる。
芥子がちらふとちるまいと、
なんのこの身が知るものぞ。

芥子は芥子、
なんのゆかりもないものを。

片戀

あかしやの金と赤とがちるぞえな。
かはたれの秋の光にちるぞえな。
片戀の薄着のねるのわがうれひ
曳舟の水のほとりをゆくころを。
やはらかな君が吐息のちるぞえな。
あかしやの金と赤とがちるぞえな。

わたしはわたし、

洎夫藍

罇入りし珈琲碗に
 洎夫藍のくさを植ゑたり。
 その花ひとつひらけば
 あはれや呼吸のをのく。
 昨日を憎むこころの陰影にも、時に顛へ
 て、
 ほのかにさくや、さふらん。

槍 持

槍は錆びても名は錆びぬ、
 殿につきそふ槍持の槍の穂先の悲しさ
 よ。

槍は槍持、伊揃、
 さつと振れ、振れ、白鳥毛。

けふも馬上の寛濶に、
 殿は伊達者の美しい男、
 三國一の備後様、

しんととろりと見とれる殿御
 槍は槍持、銀なんぼ。

供の奴さへこのやうに、あれわいさの、
 これわいさの、取りはずす、
 やあれ、やれ、危なしやの、槍のさき。

槍は錆びても名は錆びぬ、
 殿のお微行、近習まで

槍は槍持、供ぞろへ、
 さつと振れ、振れ、白鳥毛。
 雪はふれども、ちらほらと
 河岸の間屋の灯が見ゆる、
 さてもなつかし、飛ぶ鷗、

身なりくづした華美づくし、
 槍は九尺の銀なんぼ、
 けふも酒、酒、明日もまた、
 通ふしだらの浮氣づら、
 わたる日本橋ちらちらと雪はふるふる、
 日は暮れる、
 やあれ、やれ、冷たしやの、槍のさき。

壁のしたには廣重の紺のぼかしの裾模様
 殿の御容量に、ほればれと
 わたる日本橋、槍のさき、
 槍は擔げど、うはのそら、漕面つくれど
 供奴
 ぴんとはねたる附鬘に、雪はふるふる、
 日は暮れる。

やあれ、やれ、やるせなの、槍のさき。

槍は槍持、供ぞろへ、
 さつと振れ、振れ、白鳥毛。

槍は錆びても名は錆びぬ。
 殿につきそふ槍持の槍の穂さきの悲しさ

よ。

いつも馬上の寛濶に、
殿は伊達者のよい男、
さぞや世間の取沙汰に
浮かれ騒ぐも女なら。

そこらあたりの道すぢの紺の暖簾も気が

かりな、

槍は九尺の銀なんぼ、

槍をもつ身のしみじみと、涙流すもつと

め故、

さりとは、さりとは、供奴、

雪はふるふる、日は暮れる。

やあれ、やれ、しよんがいな、槍のさ

き。

紺屋のおろく

にくいあん畜生は紺屋のおろく、
猫を擁へて夕日の濱を

知らぬ顔して、しやなしやなど。

にくいあん畜生は筑前しほり、

華奢な指さき濃青に染めて、

金の指輪もちらちらと。

にくいあん畜生が薄情な眼つき、

黒の前掛、毛襦子か、セルか、

博多帯しめ、からころと。

水も流るる、鳥も啼く。

馬子は迫分、木樵は木遣、

朝は裾野の放し駒。

風よ、吹け、笠吹き飛ばせ、

笠は紅緒の荒むすび。

雨よ、降れ降れ、ざんざとかかれ、

肩の着蕙も伊達ぢやない。

山は百萬石、木萱の波よ、

木萱越ゆればお花畑、

雪の御殿に氷の巖窟、

瀧は千丈の逆おとし。

山の唄

守れ、権現、夜明けよ、霧よ、

山は命の禊場所。

行けよ、荒くれ、どんどと登れ、

夏は男の度胸だめし。

何を奥山、道こそなけれ、

さあさ、火を焚け、ごろりとままよ、
木の根枕に嶺の月。
夢にや鈴蘭、谷間の小百合、
酒のさかなにや山鯨。

おお、ほろほろ。
春はふけ、春はほうけて、
古ぼけた草家の屋根で、よ。
日がな啼く、白い野鳩が、
啼いても、けふ日は逝つて了ふ。

守れ、権現、鎮まれ、山よ、
山は男の禊場所。
雲か空かと眺めた峰も、
今ぢや、わしらが眠り床。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。
庭も荒れ、荒るるばかりか、
人も來ぬ葎が蔭に、よ。

野茨に鳩

(民謡體詩篇)

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。
茨が咲く、白い野茨が、
咲いても、知られず、散つて了ふ。

おお、ほろほろ、
何を見ても、何を爲てもよ、
ああいやだ、寂しいばかりよ。
椅子が揺れる、白い寢椅子が、
寢椅子もゆさぶりや折れて了ふ。

おお、ほろほろ。
空は、空は、いつも蒼い、が、
わしや元の嬰兒ぢやなし、よ。
世は夢だ、野茨の夢だ、
夢なら、醒めたら消えて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。
日は永い、眞晝は深い。
そよ風は吹いても盡きず、よ。
ただだるい、だるい、ばかり、よ。
どうにもかうにも倦んで了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。
氣はふさぐ、身體は重い、
おおままよ、ねんねが小椅子、よ。
子供げて、揺れば揺れよが、
溜息ばかりが揺れて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、

おお、ほろほろ。
昨日まで、堪へても来たが、
明日ゆゑに、今日は暗し、よ。
人もいや、聞くもいやなり、
それでも獨ぢや泣けて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。

心から、ようも笑へず、
さればとて、泣くに泣けず、よ。
煙草でも、それぢや、ふかそか。
煙草も煙になつて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、

おお、ほろほろ。
春だ、春だ、それでも春だ。
白い鳩が啼いてほけて、よ、
白い茨が咲いて散つて、よ、
かうしてけふ日も暮れて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。

日は暮れた、昔は遠い、
世も末だ、傾ぶきかけた、よ。
わしや寂びる、いのちは腐る、
腐れていつかと死んで了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、

おお、ほろほろ

ほろほろ、ほろろん、

あしの葉

竹林幽居

ひとりかくれたたかむら篋に、
茗荷もしろく香ににほふ。
酔うてほろりとする日でも、
わしやさびしいぞ、青雀。

朝顔

おお、ほろほろ。……

今朝はとなりの藪に咲く、
花朝顔の小ささよ。
貧しい庭の花なれば、
となりへ往いても小ささよ。

麥搗踊の唄

印旛沼は出津の人たちに
あゝあゝ搗きましょ、みなさま、ござれ、

宵の夜麥の麥搗きに。

來たよ、來ましたよ、沼河越えて、
出津のをどりの麥搗に。

麥を搗くなら、とろりと、しんと、
せめて淺夜のふくるまで。

出津の麥搗や、泣くよにござる、
搗いて、こづいて、輪に廻る。

廻ろ廻ろよ、くるりと、しんと、
即かず、離れず、出ず、入らず。

出津で麥搗や新津へひびく、
葦の葉ずれの音にひびく。

杵の音取は品よく、とろく、
麥のほこりのむせぶよに。

麥のほこりも泣くよにござる、
月の夜ごろは寢とござる。

をどれ、をどれよ、まだ夜は淺い、
ねぶた寢ごゑちや氣がたたぬ。

歌へ歌へよ、聲はりあげて、
ほれてうたへば時や知らぬ。

窓から見てる。

「なにか知んねえだが、
俺、ぼんやり見てる、

空のどつこかに穴があいたか、見てる。」

馬の顔

何か白いもの

窓から出てる。

白馬の顔だよ、

さつきから出てる。

裏の千町田は

稻刈り果てた、

刈れば寒いか、

遠いか、白馬よ、

なぜにつまんなさうに

牛曳き

さくら落葉か、

霜葉の風か、

はいそらよう、

今年や寒むかる、

日が小さい。

今年や寒むかる、

乳屋の彌助、

はいそらよう、

昨夜も牝牛に

逃げられた。

昨夜の牝牛は

何處往た、彌助、

はいそらよう、

山の三日月

食べに往た。

お月夜

耕作の戻り

黒馬よ、おつかれ、

月夜の路は、

なにか、野末が遠白い。

黒馬よ、おつかれ、

そこらの鬮で、

なにか、にほひが咲きかかる。

黒馬よ、おつかれ、

田の神さまが、

なにか、今夜はよびこざる。

那須の娘

ああ、あれもわたしだ。

煙草の花の咲いたころ、
白いかんぺう干しました。

畑の夕顔さく夜さは、

天の川見て待ちました。

七夕過ぎたら、またひとり、

外のよいのが呼びました。

ああ、あの頃は夜も晝も、

口笛吹き吹き出てました。

仕合な娘よ、

あれはわたしだ、

樂器

圓い月琴弾きましよか。

あれは十五夜、まだ早い。

瓜の半かけ、マンドリン。

乞食ぶくろに入れりやよい。

馬のしつぽで擦つて見よう。

しつぽりしないわ、あらいやだ。

そんならオルガン、足で風。

それこそいやだわ、雨靴で。

ぢやあ、どうすりやいいんだ、なにがい
い。

あなたの口笛、あの合圖。

BAN-BAN

BAN-BAN

よかたん、

牡丹の花たん、

あなたの CONSHAN

もう、花ざかりばん、

歸つてんよかたん、

安心せんもん、

むぞかるぼつてん、

歸つて寝んもん、

お寺もあるだん。

BAN-BAN

よかたん、

あなたの CONSHAN

牡丹の花たん。

お乳母さん (右譯註)

BANBAN は柳河語で乳母のこと、GO

NSHAN はお嬢ちゃんのこと。「お乳母さ

ん、お母さんいいさね、牡丹の花だよ、

おまへのお嬢さんは、もう花ざかりだ

よ、歸つてもいい、その方がいい、安

心おしよ、可愛いからけど、歸つてお

やすみ、お寺もあるだろ、お乳母さん

いいいさね、おまへのお嬢さんは、牡

丹の花だよ。」

ふくら雀

清元喜撰替唄

ふうとして、

ふくら雀がむちやくちやふくれ。

フヨウイヤサ フコレワイナ

ええさ、腹が立つ、腹が立つ、

あぢよにもかぢよにも、ヤンレ、どもな
らぬ。

フヤアトコセ フヨウイヤサ

フアリヤリヤ、これわいな、

このなんでもせへ。

空は青雲

全國青年團民謠

空は青雲、わしらは若い、

岩に子鷹の仰ぐよだ。

さうださうだ、巢立ちの若鷹だ、

いまに風切る鷹の羽だ。

海ははるばる、わしらは若い、

海に快走船の揺れるよだ。

さうださうだ、南の風待だ、

いまに乗り越す波の穂だ。

古い國柄、わしらは若い、
山と川とは搖籠だ。

さうださうだ、生れの生えぬきだ。
いまにお國の後繼だ。

時はよい秋、わしらは若い、
若い日本の起つ秋だ。

さうださうだ、世界のしののめだ、
いまにかがやく朝焼だ。

何が辛かる、わしらは若い、
心だてなら玉のよだ。

さうださうだ、鋼鐵のひびくよだ、
地から噴き出す眞清水だ。

伸びろ、耐へろ、わしらは若い、
いづれ柱になる木だ。

さうださうだ、見てゐろ、これから
だ、いまにお國を背負ふ木だ。

日本の笛

沖の大船

1

沖の大船

月の出ござる。

明日の日和が

焼けござる。

2

沖の大船

夜の明けござる。

南風の日和が
焼けござる。

あの子とろり子

あの子、とろり子

油壺うまれ、

しんところりと

見て惚れる。

あの子、とろり子

あの子この子

あの子もたうとう死んだそな。
嫁取り前じやに、なんだんべ。
蕪畑あはれにや鯛がはねる。
お墓まゐりでもしてやろか。

この子もたうとうおつ死んだ。
嫁入り前だに、なんだんべ。
花は馬鈴薯じょうも、うす紫よ。
釘かねでも叩いて行きましょか。

どの子もどの子も、なんだんべ。

色事ひとつ知んねえでな。

子芋もどつさり殖かえたによ。
かはいさうだよ、まつたく、なあ
よ。

沖の小島の

1

沖の小島の
ちらちら雪は、
すぐにこぬかの
雨となる。

えんやらえんやら、えんやらほ。

2

またも時化しけかよ
あの風雲かぜぐもは、
なまじ天城あまぎの
えんやら、朝の虹。

えんやらえんやら、えんやらほ、
えんやらえんやら、えんやらほ。
どうでもこいつは命がけ、

板子いたこは一枚、底奈落、
えんやらえんやら、えんやらほ、
えんやらえんやら、えんやらほ。

鯿網

1

明日あすは大漁か、
夕焼ゆふやくござる。
伊豆の大島、
えんやら、茜雲。

えんやらえんやら、えんやらほ、
えんやらえんやら、えんやらほ。
舟ふねなら四班よんぱん櫓 八班はつぱん櫓、
腕うでなら男おとこの若盛わかもりり、
えんやらえんやら、えんやらほ、

3

惚れりや、ねこそぎ、
西濱がよひ、
失敗りや、鯛網、
えんやら、東沖。

4

鯛か、鱈か、
あの潮先は、
虹の七色、
えんやら、大漁いろ。

えんやらえんやら、えんやらほ、
えんやらえんやら、えんやらほ。

えんやらえんやら、えんやらほ、
えんやらえんやら、えんやらほ。

網主大事か、こちとらか、

網主一人が神さまか、

どうでも食はれにや同心棒。

こちとら裸か、網雑魚か。

えんやらえんやら、えんやらほ、
えんやらえんやら、えんやらほ。

えんやらえんやら、えんやらほ、
えんやらえんやら、えんやらほ。

5

北は大山、
南は島よ、
東、房州、
えんやら、西、天城。

郷愁

月の夜ぶかに
空飛ぶものは、
夢の影鳥、
秋の聲。

島で

その一

1

えんやらえんやら、えんやらほ、
えんやらえんやら、えんやらほ。
大漁だ、大漁だ、また大漁、
舟主、網主、網の雑魚。
えんやらえんやら、えんやらほ、
えんやらえんやら、えんやらほ。

島で畑うちや、
遙かなものよ。

海のはたてに
日が落ちる。

2

島で甘黍刈りや、
果敢ないものよ。
雲の影ばか
見て暮れる。

3

島で木を挽きや、
かすかなものよ。
磯の香もする
聲もする。

4

島で牛が啼きや、
ひもじいものよ。
浪の響で、
日ははひる。

日の入り

1

海の遙かに
日の入るころは、
こころぼそさよ、
身の小ささ。

遠く離れて
泣きたい時は
せめて、磯端、
舟見山。

2

かぎり知れねど、
また山のぼり、
せめて、日の入り、
海のはて。

4

西は日の入り、
東は月夜、
なまじ、遠風、
雲の紅。

島のたより

マドロスパイプで、龜獲り上手
いつかあいつも死んだそな。

笛吹き上手の雑種兒の兄哥、
あれも肺病で死んだそな。

酒の赤鼻、西班牙わたり、

いやな爺も死んだそな。

かはいリデヤも、月の夜の海で、
かはい男と死んだそな。

薔薇で自慢の黒んぼの家も
みんな布哇へ逃げたそな。

戀の駈落ち、いつまであよか、
みんなちりぢりばらばらさ。

島の日永に羽振のきくは、
今は誰やら、ともかくさ。

紅いスカアト、眼鏡のお婆
虱つぶしてまだあやろ。

伊那

1

信州、伊那の谷、
木瓜の花盛り。

春蠶かへそか、

(春蠶かへそか、)

婿とろか。

2

夜寒

1

寒い瀬の瀬の

夜の谷越えて、

逢ひに來ました、

身も冷えた、

2

開けてくだんせ、

大寒小寒、

飛んで來ました、

手も冷えた。

伊那は夕焼、
高遠は小焼。
明日は日和か、

(明日は日和か、)

繭賣ろか。

3

桑の夜霜に
ちらつく星は。

夫婦星かよ、

(夫婦星かよ、)

まだ明けぬ。

3

闇の瀬の瀬の
藤づるづたひ、
逃げて來ました、
身も冷えた。

ここらあたりか

1

ここらあたりか、
御機嫌さんか、
軒に唐黍、
青辛子。

2

ここらあたりか、
御機嫌さんか、
背戸の柿の實、
鶉のこゑ。

野焼のころ

1

山は野焼か、
まだ春寒か、
逢はず歸るか、
夜のふけか。

2

野火のちよろり火
一山越して、
燃えて行たやら、
消えたやら。

3

野火の火立の
薄れた頃か、
明けの山鳥
ほろと啼く。

鳥かげ

1

繭を選び選り、
薄陽の窓に、
何か、鳥かげ、
氣にかかる。

2

緒絲をたてたて、
繰絲湯の繭に、
何か、陽が射しや、
氣がうだる。

3

燃りにつけつけ、
蠶の絲、小絲、
何か、もつれりや、
氣がぢれる。

4

坐繰りからから、
隅こで一人、
何か、百舌が啼きや、
氣が急きやる。

5

絲を繰り繰り、
大粹、小粹、

何か、光れば、
氣が焦やる。

6

束は、つやつや、
白絲、黄絲、
何か、ねぢれば、
氣がしまる。

7

蛹棄て棄て、
小蓼のかげに、
何か、蟲啼きや、
氣がふさぐ。

童謡

思ひ出と東京景物詩

人形つくり

(前期童謠の中)

長崎の、長崎の
 人形つくりはおもしろや、
 色硝子……青い光線の射すなかで、
 白い埴こねまはし、糊で溶かして、砥の
 粉を交せて、
 ついととろりと轆轤にかけて、
 伏せてかへせば頭が出来る。

その頭は空虚の頭、
 白いお面がころころと、ころころと……

ころころと轉ぶお面を
 わかい男が待ち受けて、
 青髯の、銀のナイフが待ち受けて、
 睨、睨、薄う睨つた睨を突いて、きゅつ
 とゑぐつて兩眼あける。
 晝の日なかにいそがしく、
 いそがしく。

長崎の、長崎の

人形つくりはおそろしや。
 色硝子……黄色い光線の射すなかで
 肥満女の回々教徒の紅頭巾、啞か、聾か
 にべもなく、
 そこらこころと撰んで分けて撮む眼玉は
 何々ぞ。
 青と黒、金と鳶色、魚眼の硝子が百ばか
 り。

ちよと弾き

箝めた、箝めたよ、兩眼箝めた……
 露西亞の女郎衆か、女郎が義眼をはめる
 よに、
 凄や、をかしや、白粉刷毛でさつと洗つ
 てにたにたと。
 外ぢや五月の燕ついついひらりと飛び翔
 る。

長崎の、長崎の

その眼玉も空虚の眼玉、
 ちよいとつまんで睨へ當てて
 面よく見て、後をつけて、合はぬ眼玉は
 ちよと弾き、

人形つくりはおもしろや。
 色硝子……赤い血のよな日のかげで
 白髪あたまの魔法爺が眞面目顔、じつと
 睨んで、手足を寄せて、

胴に針金お面に鬢寄せて集めて兒が出来
る。

兒が出来る。

酷や、可哀や、二百の人形、

泣くにや泣かれず、裸の人形、

赤う膨れた小股を出して、頭みだして、

踵を見せて、

鮭の卵か、兒豚の腹か、水子、蛭子を見

るがよに、見るがよに、

床に積まれて、踵をあげて、赤い夕日に

くわと噎ぶ。

くわと噎ぶ。

人形、人形、口なし人形、

みんな寒かる、母御も無けりや、賭博う

つよな父者もないか、

白痴か、狂氣か、不具か、啞か、

しんと黙つてしんと黙つて顫へてるや

る。

傍ぢや、ちんから目さまし時計、

ほんに、ちんから、目さまし時計

春の小歌をうたひ出す、

佛蘭西の銀のマーチを歌ひ出す。

長崎の、長崎の

人形つくりはいぢらしや、

いぢらしや。

南京さん

李さん、鄭さん、支那服さん、

あなたの眼鏡はなぜ光る、

涙がにじんで日に光る。

鳥屋の硝子も日に光る。

目白、カナリヤ、四十雀、

鶉に文鳥に黒鶉、

鳥もいろいろあるなかに、

おかめ鸚哥はおどけもの

焦れて頓狂に啼きさけぶ。

さてもいとしゃ、しをらしや、

けふも入日があかあかと

わかい南京さんは涙顔。

曼珠沙華

ゴンシヤン、ゴンシヤン、何處へ行く。

赤いお墓の曼珠沙華、

曼珠沙華、

けふも手折りに來たわいな。

ゴンシヤン、ゴンシヤン、何本か。

地には七本血のやうに、

血のやうに、

ちやうどあの兒の年の數。

ゴンシヤン、ゴンシヤン、氣をつけな。
ひとつ摘んでも、日は眞晝、
日は眞晝、
ひとつあとからまたひらく。

ゴンシヤン、ゴンシヤン、何故泣くろ。
何時まで取つても曼珠沙華、

とんぼの眼玉

お 祭

わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい。

祭だ、祭だ。
背中に花笠、
胸には腹掛、
向う鉢巻、そろひの半被で、

曼珠沙華、
恐や、赤しや、まだ七つ。

註 ゴンシヤンは九州の柳河といふ
町の言葉で、お嬢さんといふこ
とです。

わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい。
神輿だ。神輿だ。
神輿のお練だ。
山椒は粒でも、ピリツと辛いぞ
これでも勇みの山王（きんわら）の氏子だ。
わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい。
眞赤だ、眞赤だ、夕焼小焼だ。
しつかり擔いだ。

あしたも天気だ。
そら、揉め、揉め、揉め、
わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい。
俺らの神輿だ。死んでも離すな。
泣蟲やすつ飛べ。差上げて廻した。
揉め、揉め、揉め、揉め。
わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい。
廻すぞ、廻すぞ、

金魚屋も逃げろ、鬼灯屋も逃げろ。
ぶつかつたつて知らぬぞ。
そら退け、退け、退け、
わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい、
子供の祭だ、祭だ、祭だ、
提灯點けろ、
御神燈獻げろ、
十五夜お月様まんまるだ。
わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい、

わつしよい、わつしよい。
あの聲何處だ、
あの笛何だ。
あつちも祭だ、こつちも祭だ。
そら揉め、揉め、揉め。
わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい、
祭だ、祭だ。
山王の祭だ、子供の祭だ。
お月様紅いぞ、御神燈も紅いぞ。
そら揉め、揉め、揉め、
わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい。

ほうほう螢

ほうほう螢、篠螢。
螢間は赤い豆頭巾、
日暮はピカピカ、豆袴、
一のお宮で灯を貰うて、
二の宮田圃へ灯とぼしに、
三の鳥居は藪の中、
四の宮くぐれば貉堀、
貉が啼き出しや、雨がふる。
早よ早よお戻り、夜は凄い、

山のあなた

眞夜中過ぎれば歸られぬ。
ほうほう螢、篠螢。
水神様はまだ遠い。
山のあなたを、
見わたせば、
あの山戀し、
里こひし。
山のあなたの
青空よ、
どうして入日が

遠ござる。

山のあなたの

ふるさとよ、

あの空戀し。

母戀ひし。

赤い鳥小鳥

赤い鳥、水鳥、

なぜなぜ赤い。

赤い實をたべた。

白い鳥、小鳥。

なぜなぜ白い。

白い實をたべた。

青い鳥、小鳥。

なぜなぜ青い。

青い實をたべた。

あわて床屋

春は早うから川邊の葦に、

蟹が店出し、床屋でござる。

チヨッキン、チヨッキン、チヨッキンナ。

小蟹ぶつぶつ石鹼シヤボンを溶かし、

親爺おぢ自慢で鉄を鳴らす。

チヨッキン、チヨッキン、チヨッキンナ。

そこへ兎がお客にござる。

どうぞ急いで髪刈つておくれ。

チヨッキン、チヨッキン、チヨッキンナ。

兎ア氣がせく、蟹ア慌てるし、

早く早くと客ア詰めこむし。

チヨッキン、チヨッキン、チヨッキンナ。

邪魔なお耳はびよびよこするし、

そこで慌ててチヨンと切りおとす。

チヨッキン、チヨッキン、チヨッキンナ。

兎ア怒るし、蟹ア恥よかくし、

爲方よかたなくな穴へと逃げる。

チヨッキン、チヨッキン、チヨッキンナ。

爲方なくな穴へと逃げる。

チヨッキン、チヨッキン、チヨッキンナ。

祭 の 笛

げんげ草

ねんねのお里のげんげ草、
 ぼちぼち、仔牛も遊んでゐる。
 牧場の牧場のげんげ草、
 誰だか遠くで呼んでゐる。
 ねんねのお里はよい田舎、
 ぼつぼつお汽車で下りたなら、
 道はひとすぢ、田圃道、
 藁屋に緋桃も咲いてます。

ねんねのお守はるやせぬか、
 ちよろちよろ小川もながれてる、
 いつだか見たよな橋もある、
 小藪のかげには閻魔堂。

ねんねのお里で泣かされて、
 お背戸に出て見たげんげ草、
 あのあの紅いげんげ草、
 誰だか遠くで呼んでゐる。

南 の 風 の

南の風の吹くころは、
 朱纒の花がにほひます。
 朱纒の花の咲く夜さは、
 空には白い天の川。
 三つ星、四つ星、七つ星、
 敷へてゐたれば、つい、眠むて、
 ついつい、とろりとねんねした。
 南の風の吹くころは、
 朱纒の花がにほひます。

朝

蝸牛角振れ、
 野茨が小風に揺れ出した。
 雀もちゅんちゅく鳴いてゐる。
 お乳しぼりも起きて来た。
 牝牛も青草食べ出した。
 こんこん小山
 こんこん小山のお月さま、
 ついたち二日はまだ小さい。
 仔馬の耳より

まだ小さい。

こんこん仔馬も馬柵の中、

一飛び、二飛び、まだ小さい。

となりの兎より

まだ小さい。

こんこん小藪の青葡萄

一つぶ、二つぶ、まだ小さい。

仔馬の眼々より

まだ小さい。

吹雪の晩

吹雪の晩です、夜ふけです、
どこかで夜鴨が啼いています、
燈もチラチラ見えています。

私は見えます、待つてます、
何だかそはそは待たれます、
内では時計も鳴つてます。

鈴です、鳴ります、きこえます、
あれ、あれ、櫓です、もう來ます、
いえいえ、風です、吹雪です。

それでも見えます、待つてます、
何かが來るよな氣がします、

遠くで夜鴨が啼いています。

りんりん林檎の

りんりん林檎の木の下に、

小さなお家を建てましたよか、

そしたら小さな窓あけて、

窓から青空見てましたよか。

りんりん林檎がなつたなら、

鶉もちらほらまゐりましょ、

丘から丘へと荷をつけて、

商人なんでも通りましょ。

りんりん林檎に雪がふり、
一夜に眞白くつもつたら、
それこそ、かはい煙あけて、
朝から食堂を開きましょ。

りんりん林檎は焼きましょか、
むかずに皿ごとあげましょか、
お客は誰やら知りやせぬが、
今にも見えそな旅のひと。

りんりん林檎の木の下に、
小さなお家を建てましたよか、
窓から青空見てましたよか、
遠くの遠くを見てましたよか。

雀のお宿

雀のお宿は山蔭に、

小藪がこんもり、ほそながく、

下手しもてに丸木の橋ひとつ。

良寛さま

雀のおやどに日が暮れりや、
ちらちら燈あかりもともるけど、
夜更けは時雨の音ばかり。

雀のおやどはもう寒い。

誰か来るかと出て見れど、

遠くぢやちりぢり渡り鳥。

良寛さまはお坊さま、

子供の好きなお坊さま、

子供みたいなお坊さま、

雀のおやどはわびしいに、

ときたま機織る校の音、

野山にとんから響きます。

子供見たいに金もたず、

子供見たいに遊んでる。

子供といつでも遊んでる。

ある日、田圃でかくれんぼ、

夕焼小焼でかくれんぼ、

子供といつしよにかくれんぼ。

待つても待つても誰も来ず、
夜霜がきらきら光ります。

藁をかぶつてお坊さま、

息をこらしてお坊さま、

来るか来るかと、お坊さま。

しめた、積藁こりやよかる、

良寛さまは、こつそこそ、

その藁かぶつて、こつそこそ。

誰も来ませぬ、風ばかり、

野鴨が遠くで鳴くばかり、

だんだん夜ふけになるばかり。

そのうち、とつぷり日は暮れる、

子供はお家へかへります、

坊さま忘れてかへります。

やつぱり来るかと、お坊さま、

ほんとに来るかと、お坊さま、

たうとう夜つびて、お坊さま。

星がきらきら光ります、

誰も來ませぬ、夜が明けた、
雀がちゆんちゆく鳴き出した、
朝焼小焼で夜が明けた。

來ました、百姓が、すたこらさ、
お鋏をかついで、すたこらさ、
畔霜踏み踏み、すたこらさ。

今度は來たぞと、お坊さま、
深息つめつめ、お坊さま、
今度はびくびく、お坊さま。

おやと百姓が目をつける、

なんだか、變だぞ、この藁が、
おやと百姓が手をかける。

ついとほがせば、おどろいた、
おやおや、おやおや、お坊さま、
良寛さまかえ、おどろいた。

叱つ叱つ、そつとしろ、見つかるで、
子供があるかと、お坊さま、
叱つ叱つ、そつとしろ、見つかるで。

良寛さまは嘘つかず、
子供にだまされ、氣がつかず、
いつでもだまされ、氣がつかず。

御土産は。

三つ、聖みくろ、デウスさま、
おん母マリヤの觀世音、
觀世音。

四つ、よい御みこ子、神の御子、
洗禮なさるはヨハネさま。

五つ、イエス・キリストス、
南無ハ波羅キ鞞ノ僧セン善ユ守マ磨ド、
善守磨。

六つ、廐のまぐさ桶、

子供見たいなお坊さま、
なんと、のろまのお坊さま、
なんと、佛のお坊さま。

和蘭陀船

(手まりうた)

一つ、肥前の長崎に、
阿蘭陀船が舞ひ込んだ、
舞ひ込んだ。

二つ、不思議な切支丹、
伴天連尊者が御土産は、

聖廟は猶太のエルサレム、
エルサレム。

七つ、南蠻、瓜哇過ぎて、

呂宋、澳門、平戸灘、

平戸灘。

八つ、病に蘭法醫。

解剖のお書物、麻醉藥、

麻醉藥。

九つ、コンダツ、顯微鏡、

寫眞に油繪、砂時計、

砂時計。

十、遠眼鏡、エレキテル、
幻燈に、羅面琴、オルゴオル、
オルゴオル。

みんな揃へて、

紅髻加比丹が、

紅髻加比丹が、

ジャガタラくろんぼを喇叭で呼びあつめ

アラ、ラル、ラル、ラ、

ホラ、ラル、ラル、ラ、

珍妙珍妙、醜醜のお酒でひとをどり、

ホラ、ラル、ラル、ラ、

まづまづ一船あげました。

雲の歌

註。「南無や波羅菴僧善主磨」は天主教
のお祈りの言葉です。御念佛や御
題目のやうなものです。
「コンダツ」はお珠数のことです。

青空高く散る雲は

織い卷雲、眞綿雲、

鳥の羽のやうな靡き雲、

白い旗雲、離れ雲（卷雲）

一刷毛、二刷毛まだ寒い、

すうと慕引くレエス雲、

日暈、月暈濕らせて、

春さきの雲、氷雲。（卷層雲）

水脈の泡波、ろろこ雲、（卷積雲）

遙ばるつづく陽の入りは

いつも夕焼、月あかり、

雁が飛びます、わたります。（積卷雲）

日の環月の環かがやかす

高い層雲、帷雲、

灰いろ雲の濃い雲も

たまには薄すり、青の帯。（層卷雲）

葡萄鼠の霧の雲、

水と天との間の雲。(層雲)

風の層雲、わかれ雲、

地にはとどかず、棚の雲。(片層雲)

寒い黒雲、冬の雲、

かぶさりかぶさる雲の塊、

時どき、お母さんの眼のやうな

青いお空を透かしてる。(層積雲)

むくりむくりと湧く峰は、

雲のヒマラヤ、銀のへり、

お経もらひか、天竺へ

犬、狼、坊さま、豆の馬。(積雲)

雷雲はおそろしい、

晝も神鳴り、旱り雲、

宵には稻妻、朝は虹、

おどろおどろの暴風雲。(積亂雲)

迅い飛び雲、日の光、(片亂雲)

それでも雨雲、亂れ雲、

曇がふります、雪がふる、

ばらばら霰もころげます。(亂雲)

お 月 見

乳いろお月さま、朝の月、

小山羊が、めうめう、乳のみに。

空いろお月さま、晝の月、

蝶々がひらひら、繭を出た。

萌黄のお月さま、一重暈、

蛙が、ころころ、ラムネ喫む。

桃いろお月さま、合歡の月、

お鳩が、ほろほろ、ねんねした。

樺いろお月さま、十三夜、

狐が、きよろきよろ、骨盗りに。

肉いろお月さま、望の月、

啄木鳥、こつこつ、印形彫る。

金いろお月さま、二十日月、

鼻が、ごろすけ、鼻眼鏡。

緑のお月さま、闇の中、

蝸牛、こそこそ、角研いだ。

兎の電報

兎の電報

えつさつさ、えつさつさ、
 びよんびよこ兎が、えつさつさ、
 郵便はいたつ、えつさつさ、
 唐黍ひまわりばたけを、えつさつさ、
 向日葵ひまわり垣根を、えつさつさ、
 両手をふりふり、えつさつさ、
 傍目もふらずに、えつさつさ、
 「電報」「電報。」えつさつさ。

雪のふる晩

大雪、小雪、
 雪のふる晩に、
 誰か、ひとり、
 白い靴はいて、
 白い帽子かぶつて。
 大雪、小雪
 雪のふる街を、
 誰か、ひとり、

あつち行つちや、「今晚は。」
 こつち行つちや、「今晚は。」

葉つばは

大雪、小雪、
 雪のふる中を、
 誰か、ひとり、
 「泣く子を貰はう。」
 「寝ない子を貰はう。」

一
 杏あんずの葉つばは杏の香かがする。
 蜜柑の葉つばは蜜柑の香かがする。
 それでも葉つばは葉つば。

大雪、小雪、
 雪の降る窓に、
 誰か、ひとり、
 「生贖貰はう。」
 「その子を貰はう。」

二
 煙草の葉つばも葉つば。
 山椒の葉つばも葉つば。
 それでも葉つばは葉つば。

いばらの葉つばにやお針がついてる。

花のない葉つばは花のよに咲いてる。
それでも葉つばは葉つばつば。

緑の葉つばも葉つばつば。
眞赤な葉つばも葉つばつば。
それでも、葉つばは葉つばつば。

花咲爺さん

むかし嘸

山へとゆくのはお爺さん、
川へと下るはお婆さん。

むかしのむかしはなつかしい、
いつでも青空、日和鳥。

山では柴刈る鉦の音、
川では桃呼ぶ小手まねき。

ねんねのお里はなつかしい、
いつでも夕焼、藪雀。

山へとゆくのはお爺さん、
川へと下るはお婆さん。

虎の煙草

むかしむかしその昔、
虎が煙草を吸うたころ、
長白山から鶯が来て、
岩の根もとに牡丹が咲いて、
そこへ黄色いお服ベスの唐子、
唐子ほこぼこ水汲みまする。
水は清いし、深さは深し、
遠いお里で笛吹きまする。
月も出まする。夜もあけまする。
明けりや唐子の影もない。
鶯も牡丹も、影も無い。

そこで煙草の火も消えた。
虎がわつそり欠伸した。
これでおしまひ、はい、左様なら。

雨のあと

萌黄もぎの暈ぼやは
片われ月よ。
ほうほう螢、
しめれよ、ひとつ。

笹葉こさの露は
小雨こさめののこり。

ほうほう螢、
明れよ、ふたつ。

水車の音も

ことこと鳴るに、

ほうほう螢、

すうすうとわたれ。

螢の籠も、

青あを濡れた。

ほうほうほうよ、

ほうほうほうよ。

郵便くばり

郵便くばりの来る頃は、

唐黍畑の入日どき、

つくつくほふしも鳴き立てる。

郵便くばりの来る影は

いつでもぼつとり、山のすそ、

帽子のひさしが光ります。

郵便くばりの来る道は、

さやさや黍の葉、紅い房、

両手をふりふりまゐります。

郵便くばりの小父さんは
いつもの鞆で、青い鬚、
お鬚の中から笑つてる。

郵便くばりは日に一度、

唐黍畑の入日どき、

「はいはい、坊や、またあした。」

郵便くばりは待ち遠い。

つくつくほふしよ、まだ来ぬか、

誰かの手紙が来はせぬか。

寄 り 道

寄り道、小道、

牡丹のかげに、

小母さんがござつて、

いたちつこ、いたち、

早よ家へ歸れ。

寄り道、小道、

あやめの中に、

小父さんがござつて、

いたちつこ、いたち、

早よ家へ歸れ。

かやの木山

かやの木山の
かやの實は、
いつかこぼれて、
ひろはれて。

それ、爆ぜた、
今夜も雨だろ
もう寝よよ。

お猿が啼くだで
早よお眠よ。

わらび

山家のお婆さは
みろり端、
粗朶たき、柴たき、
燈つけ。

山火事焼けるな、ホウホケキヨ、
山のむじなが焼け死ぬぞ。(小田原)

蕨、わらび、

いついつ萌える。

山焼き、

かやの實、かやの實、

野焼き、

まだ火は赤い。

いついつ来やる。

山焼き、

野焼き、

夜は火が赤い。

むじなの嫁は

子供の村

新入生

小さな子供さん。

新入生の子どもさん。

学校へ行くなら、

連れてつてあげよ。

げんげの原つばを

近道しましよ。

小さな制帽さん。

うれしさうな子どもさん。

杏の木かげを、

連れてつてあげよ。

雨雨ふるなら、

お傘に入れよ。

小さな靴さん。

小さなお靴さん。

お友だちになりましょ。

連れてつてあげよ。

子どもの燕も

おさそひしましょ。

陸 と 海

鐘が鳴る。

鐘が鳴る。

あれは港の船の鐘。

鳴れば端舟が漕いでゆく。

野菜や林檎を積んでゆく。

畠のほひは新らしい、

地面の露けがこぼれさう。

鐘が鳴る。

鐘が鳴る。

あれは港の船の鐘。

鳴れば荷積をあげかかる。

魚や珊瑚と取り換へる。

沖から来るのはめづらしい。

海の潮けがこぼれさう。

からたちの花

からたちの花が咲いたよ。

白い白い花が咲いたよ。

からたちのとげはいたいよ。

青い青い針のとげだよ。

からたちは畑の垣根よ。

いつもいつもとほる道だよ。

からたちも秋はみのるよ。

まろいまろい金のたまだよ。

からたちのそばで泣いたよ。
みんなみんなやさしかったよ。

からたちの花が咲いたよ。

白い白い花が咲いたよ。

春 ま で

(子 供)

鳥網張りには夜が明けて、

鈴鴨打つのは日が暮れて、

晝間は父さん草鞋うち、

母さん、正月いつ來ます。

(母 親)

鳥網張つにら、鳥舎とやかけて、
鈴鴨うつたら、餅ついて、
みんなのお足袋も編みあげて、
坊やよ、正月ぢき來ます。

ペチカ

雪のふる夜はたのしいペチカ。
ペチカ燃えろよ。お話しましょ。
むかしむかしよ。
燃えろよ、ペチカ。
雪のふる夜はたのしいペチカ。

ペチカ燃えろよ。おもては寒い。
栗や栗やと
呼びます。ペチカ。

雪のふる夜はたのしいペチカ。
ペチカ燃えろよ。ぢき春來ボす。
いまに楊やなぎも
崩えましょ。ペチカ。
雪のふる夜はたのしいペチカ。
ペチカ燃えろよ。誰だか來ます。
お客さまでしよ。
うれしいペチカ。
雪のふる夜はたのしいペチカ。

ペチカ燃えろよ。お話しましょ。
火の粉ばちばち、
はねろよ、ペチカ。

鷹

鷹だ。鷹だ。そりや見えた。
ほらほら、飛んでる。親鷹だ。
向ふお山の白樺に、
ほらほら、とまつた。親鷹だ。

鷹だ。鷹だ。そりや來たぞ。
ほらほら、翔つた、隼だ。
何か見つけた。溪間たにあひだ。

ほらほら、ねらつた。親鷹だ。
子の鷹子の鷹、どこにゐる。
ほらほら、嵐だ、山鳴だ。
溪に砂金が光つたぞ。
ほらほら、風切る、親鷹だ。

お月さま

お月さまいくつ。
十三七つ。
七つの海を、
朝から越えて
南のはてで、

闇の夜になつて、
ちつちやいペンギン鳥が、
氷の原を
あつちの星や青いぞ、
こつちの星や赤いぞ。

雀 追 ひ

山椒太夫その二

安壽こひしや。ほうやれほ。
厨子王こひしや。ほうやれほ。
こは荒海、佐渡ヶ島、
雑太の庄の里はづれ。

安壽こひしや。ほうやれほ。
厨子王こひしや。ほうやれほ。
二人が母さま、ぼろぎもの、
めんめめくらで、竿もつて。

安壽こひしや、ほうやれほ。
厨子王こひしや。ほうやれほ。
追つても追つてもむら雀、
干した蓆の粟のうへ。

安壽こひしや。ほうやれほ。
厨子王こひしや。ほうやれほ。
遠い薄陽にほうやれほ、
雀追ひ追ひ、ほうやれほ。

短 歌

桐の花

春

春の鳥な啼きそ啼きそあかあかと外の面の草に日の入る夕べ

* ヒヤシンス薄紫に咲きにけりはじめて心ふるひそめし日

* かくまでも黒くかなしき色やあるわが思ふひとの春のまなざし

夏

廢れたる園に踏み入りたんぼぼの白きを踏めば春たけにける

* 病める兒はハモニカを吹き夜に入りぬもろこし畑の黄なる月の出

枇杷の木に黄なる枇杷の實かがやくとわれ驚きて飛びくつがへる

* 枇杷の實をかるくおとせば吾弟らが麥藁帽に受けてけるかな

* 馬鈴薯の花咲き穂麥あからみぬあひびきのごと坂をのぼれば

十一月北國の旅にて三首

葦崎の白きペンキの驛標に薄日のしみて光るさみしき

久留米旅情の歌

日も暮れて櫛の實採のかへるころ廓の裏をゆけばかなしき

公園のひとつき

手にとれば桐の反射の薄青き新聞紙こそ泣かまほしけれ

草に寝ころべ草に寝ころべ

草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとしく寝て削るなり

郊外

ほそぼそと出臍の子供笛を吹く紫蘇の畑の春の夕ぐれ

*

太葱の一莖ごとに蜻蛉ゐてなにか恐るるあかき夕暮

一九一〇暮春三崎の海邊にて

いつしかに春の名残となりにけり昆布干場のたんぼぼの花

洲崎

アーク燈點れるかげをあるかなし螢の飛ぶはあはれなるかな

あるところにて

雪の下白く小さく咲きにけり喜蝶が部屋の箱庭の山

踊子

くろんぼが泣かむばかりに飛びはぬる尻ふり踊にしくものはなし

浅き浮名

戀すてふ浅き浮名もかにかくに立てばなつかし白芥子の花

茴香咲く

わが世さびし身丈おなじき茴香も薄黄に花の咲きそめにけり

路上の春

いそいとと廣告燈もまはるなり春のみやこのあひびきの時

新橋

新らしき匂なによりうらかなし勸工場のぞく五月のころ

雨のあとさき

新らしき野菜畑のほととぎす背廣着て啼け雨の霽れ間を

*

あまつさへキャベツかがやく畑遠く郵便脚夫疲れ來る見ゆ

*

入日うくるだらだら坂のなかほどの釣鐘草の黄なるかがやき

*

晝見えぬ星のころよなつかしく刈りし穂により人もねむりぬ

手術と痲酔

朝顔を紅く小さしと見つるいのち消えむとぞする鳴け鳴け鈴蟲
秋のおとづれ

松脂のほひのごとく新らしくなげく心に秋はきたりぬ
秋 思

食堂の黄なる硝子をさしのぞく山羊の眼のごと秋はなつかし
初 秋

ひいやりと剃刀ひとつ落ちてあり鶏頭の花黄なる庭さき
晩秋の一夜

黒き猫しづかに歩みさりにけり昇菊の絃切れしたまゆら
歌舞伎座十月狂言所見

常盤津の連弾の撥いちやうに白く光りて夜のふけにけり
百舌の高音

百舌啼けば紺の腹掛新らしきわかき大工も涙ながしぬ
冬のさきがけ

ふくらなる羽毛襟卷のほひを新らしむ十一月の朝のあひびき
*

いちはやく冬のマントをひきまはし銀座いそげばふる雲かな
雪

厨女の白き前掛しみじみと青葱の香の染みて雪ふる
*

君かへす朝の鏝石さくさくと雪よ林檎の香のごとくふれ
早 春

みじめなるエレン夫人が職業のミシンの針にしみる雨かな
*

沈丁の薄らあかりにたよりなく齒の痛むこそかなしかりけれ
*

ふくれたるあかき手をあて婢女が泣ける厨に春は光れり
春 愁

わかき日の路上にて

歎けとていまはた目白僧園の夕べの鐘も鳴りいでにけむ

*

定齋の軋みせはしく橋わたる江戸の横綱うぐひすの啼く

*

鐸鳴らす路加病院の遅ざくら春もいましかをはりなるらむ

花園の別れ一首

君と見て一期の別れする時もダリヤは紅しダリヤは紅し

法廷へのゆくみちにて

向日葵向日葵囚人馬車の隙間より見えてくるくるかがやきにけれ

許されたり許されたり

監獄いでぬ重き木蓋をはねのけて林檎函よりをどるここに

*

監獄いでぬ走れ人力車よ走れ街にまんまろなお月さまがあがる

監獄いでてじつと顫へて噛む林檎林檎さくさく身に染みわたる

*

空見ると強く大きく見はりたるわが圓ら眼に涙たまるも

木更津へ渡る

いと酔き赤き石榴をひきちぎり日の光る海に投げつけにけり

冬來る

唳々とひとすぢの水吹きいでたり冬の日比谷の鶴のくちばし

そののち

吾が心よ夕さりくれば蠟燭に火の黠くごとしひもじかりけり

雲 母 集

卵

大きな手があらはれて晝深し上から卵をつかみけるかも

大 鴉

大鴉一羽渚に黙ふかしうしろにうごく漣の列

華魁ヶ濱

来て見れば鯛ころがる蕪畑燕みどりの葉をひるがへす

城ヶ島

日暮るれば枯草山の枯草をただかきわけていそぐなりけり

新 生

水あさぎ空ひろびろし吾が父よここは牢獄にあらざりにけり

五 月

魚かつぎ丘にのぼれば馬鈴薯の紫の花いま盛りなり

ある時は

ある時は誰知るまいと思ひのほか人が山から此方向いてゐる

生きの身

麩麩を買ひ紅薔薇の花もらひたり爽やかなるかも両手に持てば

崖の上の歡語

海雀つらつらあたまそろへたり光り消えたり漣見れば

菖蒲園

ひとり来て涙落ちけりかきつばたみながら萎み夏ふかみかも

遊ヶ崎遊泳

ちちのみの父を裸になしまゐらせ泳ぎにとゆくその子が二人

ある日

しんしんと寂しき心起りたり山にゆかめとわれ山に來ぬ

寂しき日

春過ぎて夏来るらし白妙のところてんぐさ取る人のみゆ

*

ふくふくと蒲團の綿は干されたり傍そばに鋭き赤たうがらし

海底

寂しさに海を覗けばあはれあはれ章魚たこ逃げてゆく眞晝の光

漣

網高く干せるその上の漣のかぎり知られねさざなみの列

*

麗らかや此方へ此方へかがやき来る沖のさざなみかぎり知られず

舟

うつらうつら海に舟こそ音すなれいかなる舟の通るなるらむ

地面と野菜

大きな足が地面を踏みつけゆく力あふるる人間の足が

投網うちの歸途

蕪の葉に濡れし投網なまなをかいだぐり飛びか蹴る河豚を抑へたりけり

晝休憩

積薬のかげむくむく湧きあがるパイプの煙見つつ眞赤な日にあたり居り

黍畑

三日の月ほそくきらめく黍畑あはほは黍とし目の醒めてるつ

*

ほのかなる人の言葉に觸りたれば驚くものか黍は夜よふけて

二本の棕梠

天の河棕梠と棕梠との間より幽かに白しふ闌けにけらしも

*

耳澄ませば闇の夜天をしろしめす圖り知られぬものの聲すも

水邊の午後

鬱蒼こんもりと楊柳やなぎかがやくまさびしき遠き入江に日の移るなり

二町谷小景

網の目に閻浮檀金の佛えんぶだんりて光りかがやく秋の夕ぐれ

* 兩の掌うでに輝りてこぼるる魚のかず掬へどもまた輝りこぼるる

* 落つ日の照りきはまれば何がなし小鳥岬をいま放れたり

* 海の波光り重なり日もすがら光り重なりまた暮れにけり

山中秋景

* 木々の上を光り消えゆく鳥のかず遠空の中にあつまるあはれ

* 山峽やまがせに橋を架けむと耀くは行基菩薩か金色光に

* 谷底に人間のごと戀しきは彼金柑の光るなりけり

引橋の茶屋のほとりをいそぐときほとほと秋は過ぎぬと思ひき

漁村晩秋

かくのごとき秋の簡素をわれ愛す枯木いもぎ一木幽かに光る

金柑の木

はるばると金柑の木にたどりつき巡禮草鞋むらおをはきかへにけり

遠樹抄

西方に金の遠樹のただふたつ深くかがやく何といふ木ぞ

閻魔の反射

畑打てば閻魔大王光るなり枯木二三本に鴉ちらばり

* 歛下ろせばうしろ向かるる冬の畑そこに眞つ赤な閻魔の反射

木がらし

はるばるに枯木わくれば甘藷畑いもほけおつ魂げるやうな日が落ちて居る

仲 秋

寂しさに秋成が書讀みさして庭に出でたり白菊の花

雪 夜

この庵にまこと佛の坐すかと思ふけはひに雪ふりいでぬ

冬青の葉に雪のふりつむ聲すなりあはれなるかも冬青の青き葉

めづらかに人のものいふ聲ぞする思ふに空も明けたるならむ

見桃寺の鶏長鳴けりはろばるとそれにこたふるはいづこの鶏ぞ

雪 後

あかつきの雪に寂しくゆらめくは木々に囀る雀があたま

木の枝に雀一列ならびみてひとつびとつにもものいふあはれ

雀の卵

葛飾閑吟集

薄 野

薄野に白くかぼそく立つ煙あはれなれども消すよしもなし

雀子嬉遊

飛びあがり宙にためらふ雀の子羽たたきて見居りその揺るる枝を

夏

香ばしく寂しき夏やせかせかと早や山里は麥扱きの音

紫蘭咲く

紫蘭咲いていささか紅き石の隈目に見えて涼し夏さりにけり

うしろ向き雀紫蘭の蔭に居りや々に射し入る朝日の光

晴日小閑

この山はたださうさうと音すなり松に松の風椎に椎の風

棗の花

我が庵の厠の裏のなつめの木花のさかりも今は過ぎたり

江戸川べり

夏浅み朝草刈りの童らが素足にからむ犬胡麻の花

藪 蔭

夕野良の小藪が下の合歡の花きり雨かかかかる雛燕のこゑ

螢

河土手に螢の臭ひすずろなれど朝間はさびし月見草の花

晝ながら幽かに光る螢一つ孟宗の藪を出でて消えたり

樗 咲く

羽根そよがせ雀樗の枝に居り涼しくやあらむその花かげは

蜻 蛉

日の盛り細くするどき萱の秀に蜻蛉とまらむとして翅かがやかす

ややに避けて蜻蛉日かげにとまりたりそよぎかがやく青萱のもと

群蝶の舞

雪のごと湧きて翅ばたくまつ白の蝶下には暗きさざなみの列

唐 黍

ながれ来て宙にとどまる赤蜻蛉唐黍の花の咲き揃ふうへを

今日もまた郵便くばり疲れ来て唐黍の毛に手を觸るらむか

百日紅 咲く

百日紅の花のさかりとなりにけり眺めてを居らな寂しがりつつ

百日紅の花も咲きたり時をりは遊びに來ませやや遠くとも

秋近し

おのづからうらさびしくぞなりにける稗草の穂のそよぐを見れば

木槿と雀

はらはらと雀飛び来る木槿垣ふと見ればすずし白き花二つ

二百二十日

ぽつぽつと雀出て来る残り風二百二十日の夕空晴れて

月夜こほろぎ

父の背に石鹼つけつつ母のこと吾が訊いてゐる月夜こほろぎ

良夜

月今宵背戸の畑の秋蕎麥に夜露ふりこぼれ晝のごと明し

庭前の秋

新らしく障子張りつつ茶の花もやがて咲かなとふと思ひたり

夕焼

山松の音のとわたる日の暮は夕焼の紅き空もすべぞなき

*

山松の姿さびしき日の暮は障子早く閉めてひとり飯食ふ

田圃の晩秋

華やかにさびしき秋や千町田の穂波が末をむら雀立つ

薄に雀

ぽつぽつと雀飛び出る薄の穂日暮まぢかに眺めてゐれば

時雨

松風のしぐるる寺の前通とほる人はあれど日の暮れの影

田圃

目に見えて冬の陽遠くなりけりきのふもけふも薄くみぞれして

初夜過ぎ

田末わたる時雨の雨は幽かながら初夜過ぎて出づる月のさやけさ

霜と雀

雀が二羽ころげ羽はたくうつつなさ落ちむとしてはまた飛びあがる

田家の冬枯

枯れ枯れの唐黍の秀ほに雀すずめひてひようひようひようと遠し日の暮の風

*

ひとつひとつ雀出て来る掛稻かきの外のそとこり陽ひ遠し早や時雨れつつ

蒲の穂

蒲の穂のさむざむさむざむ明る澤の曲くま鶯多くおとこるれど聲ひとつせぬ

*

蒲の穂にひとひら白き冬の蝶ふと舞ひあがる夕空の晴

雀の宿

わが宿は雀のたむろ冬来れば日にけに寒し雀のみ群れて

咳すれば

咳すれば寂しからしか軒端より雀さかさにさしのぞきををる

今さらに

今さらに云ふ事は無し妻とめて夕さりくれば燈ひをとぼすまで

野川

下肥しもこの舟曳ふねひくならし夜の明けて野川の氷こゑたつるなり

夕照

寒むざむし背戸の水田のうす氷あか茜あかねさしつ々夕焼早し

春立つ

巢をつくる二羽の雀がうしろ羽根かすかにそよぐ春立つらむか

春の耕田

夕雨ゆふさめのしみらにそそぐ茨あざの垣かき萌えいづるそばに馬近づきぬ

*

春といへどまだ寒むからし茨の葉に面寄おもする馬の太くふと墮おちる

*

雨ほそき破垣やれがきちかくひそひそと田を鋤く人の馬叱るこゑ

春雨

霧雨きりさめのこまかにかかる猫柳つくづく見れば春たけにけり

夕べの虹
虹の輪の七色ふかき片裾は雨しとどなり早苗田の上

輪廻三鈔

歸心矢の如し

ちちのみの父の島より見わたせば母の島見ゆ乳房山見ゆ
妻を歸して

貧しさに妻を歸して朝顔の垣根結ひ居り竹と繩もて

憐 憫

この我や心しいたらぬ女子をあはれとは思へ憎みあへなくに

蟹味噌

蟹を搗き蕃椒挿り筑紫びと酒のさかなに噛む夏は來ぬ

鴉

澄みわたる光のなかにゐる鴉かあと一聲啼きにけるかも

雨ふれば

雨ふれば青き御空ぞなつかしきその青空も寂しと思へど

麗 日

摩耶の乳長閑にふふますいとけなき佛の息もききぬべき日か

雀の卵

寒水臻る

おのづから水のながれの寒竹の下ゆくときは聲立つるなり

時雨の後

そぼ濡れて竹に雀がとまりたり二羽になりたりまた一羽來て

厨邊の霜

今朝見れば置く霜濃くて厨邊のごみための影も紫に見ゆ

*

霜かぶる蕪がそばに目つむるは深むらさきの首長の鴨

大王の行幸かあらし旗立てて雪の御門を騎馬出づる見ゆ

白牛

瓦斯の燈に吹雪かがやくひとところ夜目には見えて街遙かなる

山家鈔

奥山の山の狭間にふる雪のほのぼのつもり夜明けぬるかも

朝

寂しさに堪へてあらめと水かけて紅き生薑の根をそろへけり

人みな

人みながわれをよろしと云ふ時はさすがうれし心をどりて

*

人みながわれをわろしと云ふ時はさすがさぶし心ぼそくて

白木蓮花

白木蓮の花の木の間飛ぶ雀遠くは行かね聲の寂しさ

長歌

觀 相 の 秋

紅葉を焚いて

紅葉して来た、庭の楓が紅葉して来た。紅葉ばかりになつて了つた。障子を開けて、つくづくと眺めてみると、かうまで楓の多い庭だつたかと、今更に驚かされる。私も妻も二人とも、その楓の中の一つ家に、今まで居たかと驚かれる。今朝はまた殊更に紅葉の光澤がよう冴えて、小松の傍の楓など、明るいほどに紅く透いてる。まだ黄色い下葉や裏葉、あれも程なく枯れるであらう。ああ、秋もふけたと見てゐるうちに、もう褪せかけて風もないのにはらはらと散る紅葉もある。それも寂しい私達には恰度程よい寂しさだ。簡素な紅葉、静かな紅葉、その紅葉の

下枝には、雀も二羽来て啼いてゐる。寒い朝ゆゑ、それは冷めたい囀りだ。二羽でも雀も寂しからう、紅葉ばかりで、と思ふとまた、私達の寂しい旅の姿がかへり見らるる。紅葉して来た庭の楓も紅葉して来た。紅葉ばかりになつて了つた。

紅葉して来た。庭の楓が紅葉して来た。紅葉ばかりになつて了つた。寒くなつたと私が云へば、妻も左様で御座います、寒い朝でも袖を合せる。さうはいふものの、たとへ二十日も住み馴れて見ると、この離家が何とほなしに古びて来て、矢つ張り二人の住居らしい。二人もどうやら落ちついて来た。紅葉でも焚いて見ようかと、私が云へば、妻も素直に、焚いて見ませう、寂しいからと庭に下り立つ。竹の箒で私が掃けば、蹲んで妻が拾ひ集める。かさこそと、落葉と落葉が擦れ合うて、それを二人で集めてゐれば、今はもう秋も限りと思はれる。遠州風の濡

れ石の上、枯れた芝生の凹みなどに、落葉は一入哀れ深うて、土の濕りもにじみ過ぎてる。紅葉して来た。庭の楓も紅葉して来た。紅葉ばかりになつて了うた。

煙が立つ。煙が立つ。庭の楓の紅葉の蔭から、煙が立つ。紅葉を焚いて、ふすふすと白うくすぼる煙のかげで、温かいぞと私が蹲めば、妻も双手をかざして蹲む。青い枳殻の小枝などまた折りくべて、長い感冒であつたと私が云へば、私もどうやら感冒氣でと、妻もわびしい。大切におし、旅で病んでは心細い、私も今度は頼りなかつたと、私も紅葉をまた火にくべる。ほんとにね、それでも早うお癒りになつてよかつたと、妻もまた紅葉をくべる。それもみなお前のお蔭だ、よく来て呉れた、難有かつたと、しみじみ、私は煙に噎せる。いいえと妻も、向うへ立つて、紅い紅葉を拾うて来る。早う歸らう、お前がまた病氣

にならぬうちにと云へば、ほんとに早く歸りませう、何と云つても自分の家がいちばんいい、旅は寂しい、心細い。殊にここらは霜が深うて、もう雪にでもなりさうなと、一きは赤く火を吹き立てる。煙が立つ。煙が立つ。紅い楓の葉蔭から煙が立つた。

紅葉して来た。庭の楓が紅葉して来た。紅葉ばかりになつて了つた。旅に来て長らく病んだが、心細いものだ。俳諧の聖芭蕉でさへも、旅に病んでは寂しかつたか、夢は枯野をかけ廻ると云うたではないか。お互ひに大切に事だ、愛惜い物は命だと、私が云へば、妻も寂しく笑つて噎せた。いい煙だ、寂しいいい紅葉だ、せめてもう少し温まつてと、紅葉を焚いて、枝の紅葉ももう末かと仰いで見れば、はらはらとまた滾れてくる。もういい、もういい、いい程に焚いて朝飯にしませう。煙が立

つ。煙が立つ。紅い楓の葉蔭から煙が立つた。

山中消息

寂しいものは山の住居だと人もいふ。人里を少しでも離れると、けつく氣樂なと思はぬでもないが、さりとて、人に逢はねばやつばし寂しいものだ。たまさか通りがかりの人聲の、小荷駄馬でも曳き、蓆でも着て、裏の粗路を、えつちやほう、はいしと、うとうと叱りながらに上り下りする、耳につき、つい目につくのも心丈夫な思ひがする。いよいよ死にました、小さい赤んぼでございましたと、小さい棺をかついで来てさへなほさうだ。生きとし生ける鴨や百舌、鶉のたぐひ、木々の枯葉に驚く聲も、けけつちやう、ちやうちやう、きいりきいりと親まる。

空は晴れても、冬は日あしが短うて、いつとなく黄ばみかける、早くも夕焼方の風向となる。縁に出て、ぼつねんと眺めてみると、何ともないやうでゐて心ぼそさが身に染みる。傾いた萱屋根の山門も、向うに見えて、其處から續いた一筋道の、此方はさらに奥ぶかくて、雀のお宿とでも云ひさうな、これが私住居かと思へば、堪へられぬ。朽ちはてた外柱には、日あたりがよくてか、霸王樹や龍舌蘭など匍ひ絡んではあるものの、掛け忘れられた數珠の緒の二くさり三くさり、もうぼろぼろに腐れかけてる。これが佛のゐられる寺だ。

寒々と揺れてゐるものは、孟宗のほづえ、ささ栗のそばの榎の木、枯枝の桐の苔、墓原の香のけむり。井戸端の紅い山茶花は散りつくして、昨日咲いた庭の白薔薇だけが新らしかつたが、今朝人が来て切つて了つた。ところどころに白い萱の穂もそよ

げば、一羽の白い鶏でさへ、吹かれどほしで消えもやらぬ。それは寂しい揺れ方だ。

遠々に消えてゆくものは雀のかけ、多陽の名残、時雨も幽かにわたつてゆくが、ともすると、いつのまにやら雪になつてゐる。函根あたりは猶さらだ、白い白い雪の野山だ。

簡素だと思へば簡素、寂しいと云へば寂しい。一人でゐてもゐられるものの、なまじ、二人で慰め顔に、エネチアまがひの古い洋燈など點して見るので悲しくなる。人は人、どうせ私は私だと思つて見ても、その人ごとが忘れられぬので、便りも待つ、いぢらしくもなれば腹も立つ。郵便くばりにも番茶の一つもほらうじて出す。それかと云うて、その日その日の新聞紙でさへ、日が暮れてからやつと着くのでよくは讀めず。夜はひとしほ波

の音までが聞えるゆゑ、明日の日和なぞ氣にかかつて、月の光が白い障子に射すまでは、雨戸も閉めねば、寝ねもせず。

夜が夜中、厠に立てば、裏の山には月が澄んで、畑の葱さへ一つ一つに眞青だ。蟲ももう鳴かぬが、それだけ凄しい。首を竦めて、咳く時の寒さと云へばまた格別だ。せめて風邪でもひかぬやうにと、頸巻なぞして、手水つかへは水も凍つた。

かうした私のこの頃です。

(以上二篇は口語體長歌の風を帯べる詩文なり)

竹の林の歌

わが宿の竹の林に、夕あかりかがよふ見れば、その竹の濕る根
 ごとに、何か散り、深く光れり。その節のひとつひとつに、何
 かまた留り光れり。その笹のさみどりの葉に、何かまた揺れて
 光れり。金色こんじきのその光るもの、こまごまと眼に染みるもの、雨
 ふりてあかれるのちは、とりわけて揺れてうつくし。寂しくて
 見てゐるきはは、いよいよ消えてうつくし。揺るるともまだ
 見て居らむ、消ゆるともまだ見て居らむ、堪へ堪へて日の暮る
 るまでなほなほに寂しがりつつ。わがやどの竹の林の夕あかり、
 裏山松の松風の音のこなたに。

孟 宗 と 月

さわさわと揺るるものあり。午夜こやふけて揺るるものあり。わが
 窓の硝子戸の外そと、眞透かせば月に影して凍え雲絶えず走れり。

圓まるかなる望月ながら、生蒼く隈する月の、傾けばいよよ薄きを、
 あな寒や揺るる竹あり。孟宗の重きしだれの重なるのその上に
 抜けて、ただひとり揺るる秀はなのあり。目か醒めし、夜風か出で
 し、さわさわと揺れて遊べり。しだれつつ前にうしろに、照り。
 かげり揺れて遊べり。圓かなる望月ながら、生蒼く隈する月の
 飛び雲の叢雲が間まふと洩れて時をり急に明るかと思ふ時なり。
 目に見えてさわさわと、照り浮ぶ孟宗の、あな、一きは強
 き狐光きつねのかりのその月に、さながら生きて踊るかに、近明りして、勢いきほ
 ひ舞ふ、かと思ればまた、何か暗く薄かげりして、揺らぎ止み、
 揺らぎ騒立さわだつ。この夜さや、夜鳥も啼かず、藪かげの隣の寺も
 しんしんと雨戸鎖さしたれ。時として川瀬の音の浪の音と響き添
 ふのみ。それもただ遠し、氣疎し。あなあはれ、この夜の山に、
 何しらず目のさめしもの、我のみか、揺れそよぐあり。揺れそ
 よぎ獨り遊ぶと、揺れそよぎこの目の外そとに、またさわさわと音

立ててゐる。

立枯並木の歌

霜ふかき野川の堰、あはれよと今朝見に來れば、いつとなく水
量涸れつつ、隙間なく氷張りけり。枯すすき、土堤の枯草、凍
りつき白くさびしく、兩側の立枯並木、いよいよに白くさびし
く、雪空の薄墨色にこまごまと梢明り、下空の小枝のほそ枝立
ちつづき、見れども飽かず、入り交り網目して透く、兩側の立
枯並木、下見れば一側並木、時をりにとまる鴉もその枝の霜に
すぼまり、渡り鳥ちらばる鳥もその空に薄煙立つ。風吹けばか
すかに揺れ、雪ふればいよよしづもり、さむざむと時雨ふる夜
半も、月あかり落ちゆく曉も、消なんとし消えずかすかに、現
にもうつしけなくも、ただ寂し薄し果敢なし。霜ふかき野川の

堰、今朝もまた氷張りけり。その川の兩側つづき。隙間なく枯
木つづけり。あなあはれ立枯並木。

童 と 母

垂乳根の母の垂乳に、おしすがり泣きし子ゆゑに、いまもなほ
我を童とおぼすらむ、ああ我が母は、天つ日の光もわすれ、現身
の色に溺れて、酒みづきたづきも知らず、酔ひ疲れ歸りし我を、
酒のまばいただくがほど、悲しくもそこなはぬほど、酔うたら
ば早うやすめと、かき抱き枕あてがひ、衾かけ足をくるみて、
裾おさへかろくたたかす、裾おさへかろくたたかす、垂乳根の
母を思へば泣かざらめやも。

麻 布 山

麻布山淺く霞みて、春はまだ寂し御寺に母と我が詣でに來れば、
 日あたりに子供つどひて、風をあげ獨樂を廻せり。立ちとまり
 眺めてあれば思ほゆる我がかぶる髪。ほほゑみて母を仰けば母
 もまたほほと笑ませり。けだしくや我がかぶる髪母もまた忍ば
 すらむか。我が母は何も宣らさね、子の我も何もきこえね、か
 かる日のかかる春べにうつつなく遊ぶ子供を見てあれば涙しな
 がる。

—了—



◀ 選 歌 詩 秋 白 ▶

大正十四年七月十日印刷
 大正十四年七月十五日發行
 大正十五年八月廿八日十七版

(定價五拾五錢)

著 作 者

北 原 白 秋

發 行 者

佐 藤 義 亮

東京市牛込區矢來町三番地

東京市牛込區矢來町三番地

發 行 所

新 潮 社

電話牛込

八八八八
〇〇〇〇
九八七六
番番番番

番二四七一(京東)替振

印 刷 所

東京市小石川區西江戸川町
電話小石川五九二番

富士印刷株式會社

印刷者 佐々木 俊一

北原白秋著作書

◇詩集

邪宗門 易風社 東雲堂 四三・三一五
 思ひ出 東雲堂 アルス 四四・六・五
 東京景物詩 東雲堂 大北 二・七・一
 印度更紗 文淵堂 三・九・一
 白金の獨樂 文淵堂 三・二・二八
 わすれなくさ 阿蘭陀書房 アルス 四・五・三
 雪と花火 東雲堂 五・七・一
 思ひ出 (マ)字 阿蘭陀書房 七・七・二三
 白秋詩集 (第一) アルス 九・八・三六
 白秋詩集 (第二) アルス 一〇・一・一
 觀相の秋 アルス 二・八・一
 水墨集 アルス 二・三・六・八

◇歌集

桐の花 東雲堂 アルス 二・一・二五
 雲母集 阿蘭陀書房 アルス 四・八・二二
 北原白秋篇 抒情詩社 六・六・五
 木馬集 アルス 八・七・二三
 第二木馬集 アルス 九・二・二〇
 雀の卵 アルス 一〇・八・二三
 北原白選集 アルス 一一・一・一
 ◇小唄集
 白秋小唄集 アルス 八・九・一
 あしの葉 アルス 二・三・一〇・二三
 ◇民謡集
 日本の笛 アルス 二・四・二〇

◇童謡集

とんぼの眼玉 アルス 八・一〇・一五
 兎の電報 アルス 一〇・五・一八
 まざあ・ぐうす アルス 一〇・二・二三
 祭の笛 アルス 一・六・二〇
 羊とむじな アルス 二・一〇・一〇
 花咲爺さん アルス 二・七・一〇
 子供の村 アルス 一・三・五・五
 白秋童謡集 第一 卷 阿ルス 一・三・七・一〇
 お日本の童謡 アルス 一・三・二・二五
 ◇散文集
 白秋小品 阿蘭陀書房 アルス 五・二・二三
 愛の指輪 春陽堂 七・六・二二
 雀の生活 新潮社 九・二・二〇
 童心の春陽堂 アルス 一〇・六・一八
 洗心雑話 アルス 一〇・七・一八
 季節の窓 アルス 一四・五・三

北原白秋氏著

(改刷新版)

長篇 雀の生活

四六判特製 定價貳圓 郵送料拾錢

◇白秋氏の繪畫を日本紙別刷り十面を挿入した◇

白秋氏、雀の生活を描いて、つぶさに人間の悲願を寄す。鋭敏なる感覚と豊富なる聯想とは、その表情姿態の微を盡すと共に、これを中心とする幾多の情景を展開して層々盡くるところを知らない。而も、全篇を裏附くるに、大自然に對する禮讚愛慕の至情を以てし、この小動物の世界の到るところに神のこのころを見た。長篇散文詩として、作者空前の力作であり、また文壇はじめて見るの新體である。玲瓏の姿、縹渺のひびき、詩人白秋氏の全面目はこゝに悉くとも云ふ可き雄篇である。

詩集 小曲はつ戀

川路柳虹氏著

價壹圓參拾錢 郵送料拾錢

詩集 靜かなる時

百田宗治氏著

價壹圓 郵送料八錢

詩集 純情小曲集

萩原朔太郎氏著

價八拾錢 郵送料六錢

代 表 的 ・ 名 作 選 集 目 次

第一	牛肉と馬鈴薯	獨歩	十六	別れた妻	秋江	卅一	啄木選集	啄木
第二	坊っちゃん	漱石	十七	はつ	姿天外	卅二	運命の丘	抱月
第三	蒲	團花袋	十八	お艶殺し	潤一郎	卅三	和	解直哉
第四	透谷選集	透谷	十九	俳諧	師虚子	卅四	末	枯万太郎
第五	春	藤村	二十	煤煙	草平	卅五	善心悪心	里見弴
第六	わが袖の記	一穂牛	廿一	子規	枕子規	卅六	俊	寛菊池寛
第七	たけくらべ	秋聲	廿二	選集	花	卅七	將	軍龍之介
第八	爛	凡四迷	廿三	そ	の妹實篤	卅八	涓	滴鷗外
第九	平	凡四迷	廿四	旅	役者幹彦	卅九	泉	谷集武郎
第十	高野	聖鏡花	廿五	物言はぬ顔	未明	四十	蝙蝠の如く	生馬
第十一	何處へ	白鳥	廿六	ふところ日記	眉山	四一	子をつれて	善藏
第十二	今戸心中	柳浪	廿七	鱧	の皮小劍	四二	白秋詩歌選	白秋
第十三	耽	溺泡鳴	廿八	女役者	俊子	羽二重表紙・菊半截特製 價五拾五錢・郵送料六錢		
第十四	明治詩歌選	六家	廿九	南小泉村	青果			
第十五	戀ざめ	風葉	三十	少年	行星湖			

